

地域差に基づく淡路方言の下位区分の試み¹

中澤 光平

koheinakk@12.alumni.u-tokyo.ac.jp

キーワード： 淡路方言 地域差 下位分類 アクセント 方言語彙 分布図

要旨

兵庫県下の淡路島（および属島の沼島）で話されている淡路方言には個別的ながらアクセントや語彙に地域差が認められる。豊富に見られる地域差のうち、淡路方言の下位区分の基準となり得る項目を選び、どのような区分が可能かを考察する。その結果、淡路方言は北部型、中部型、南部型と大きく3つに下位区分され、北部型では岩屋、中部型では由良、南部型では福良と沼島をそれぞれさらに分ける必要がある。さらに、現段階では「中部型」の設定には問題があることを述べる。

1. はじめに

本稿の目的は、兵庫県下の淡路島（および属島の沼島）で話されている淡路方言について、その内部に見られる地域差をもとに、淡路方言の下位区分を試みることである。アクセントと方言語彙の地域差を概観した後、共時的な区分を考察し、通時的観点からの問題を述べる。

1.1 淡路方言の地域差に関する先行研究

淡路方言の地域差に関しては以下のような先行研究がある。

山本俊治・飯野百合子（1962）は、語彙9項目と語法8項目をもとに兵庫方言の分派を考察し、淡路方言を北淡方言、洲本方言、南淡方言に分け、北淡方言をさらに東浦方言と西浦方言に分けている。

禰宜田龍昇（1986）は、アクセントなどの地域差をもとに、北部、中部、南部に分け、周辺方言と関連付け、北部が河内・大和系、中部が泉州・和歌山系、南部が徳島系であるとする。また、北部の岩屋と富島、南部の由良の3地点は特異であるとして別区画としている²。

山岡華菜子（2012）は、アクセント変化の進度（進行の度合い）という観点で、若年層も含めた変化の地域差を調査し、禰宜田（1986）の3区分と「概ねかさなる傾向にある」（p.56）と述べているが、中部アクセントの範囲に含まれる洲本と由良には差があると指摘している³。

¹ 本稿は総合地球環境学研究所言語記述研究会第52回会合（2014年1月）での発表をもとに大幅に加筆、修正したものである。コメントをくださった皆様にお礼申し上げる。本研究は日本学術振興会科学研究費補助金（研究課題：「近畿周辺の消滅に瀕した方言に残存する古態の調査と記録」）の助成を受けている。

² 禰宜田（1986: 21）に区画図が載っている（図Bと図Dで「アクセント」と「方言グループ」の表記が逆になっているという誤植がある）が、そこでは由良は中部に属しているようにも見える。

³ 山岡（2012: 51）その他の記述を総合すれば、洲本は北部寄り、由良は南部寄りと見ているようだ。

1.2 調査概要

筆者は今まで、淡路方言の地域差について、主に成立過程という通時的な観点から考察してきた(中澤 2011b, 2012, 2013, 2014)が、本稿ではその成立過程は中心的なテーマとはせず、共時的にどのような区分が可能かを論じる。その一環として、今回はアクセントの地域差と語彙の地域差について考察する。

なお、現在の淡路島は、北から淡路市・洲本市・南あわじ市の3市体制となっているが、1965年～2005年は1市10町であった(図1参照)。淡路町・北淡町・東浦町・一宮町・津名町が淡路市、五色町・旧洲本市が現洲本市、緑町・三原町・西淡町・南淡町が南あわじ市となったが、本稿では合併前の旧行政区画の1市10町を方言の調査単位とする。ただし、福宜田(1986)が特異であるとする岩屋(≡淡路町)、由良(旧洲本市)に加え、福良(南淡町)と属島の沼島(南淡町)の各地点は分けて扱う⁴。

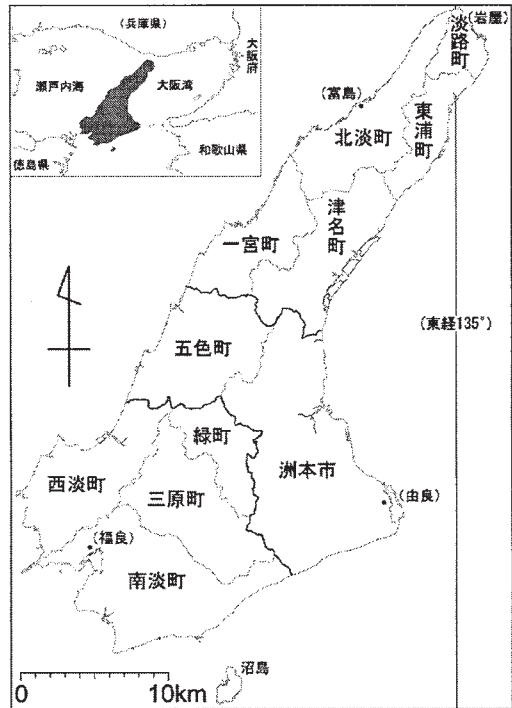


図1 淡路島の地図(1市10町時代)

本稿のデータは2010年8月～2014年8月に断続的に行った調査で得られたものである。アクセント調査は1～3人の面接調査による調査票読み上げ方式で、語彙調査は人数は限定せず、標準語形を方言形に変えて答えていただく方式を採った。本稿の対象とする話者は、世代差の影響をなるべく小さくするため戦前(1945年以前)生まれの方に限定し、言語形成期(5歳～20歳程度)を同じ方言地区で過ごし、現在もその地区に住んでいる方と基本とした。近隣地域に住み元の地区と現在も深く関わっている方も対象に含めるが、移住があると正確な地点が定まらないため、同じ方言地区内で移住があった方も含め、地図化する際には省いている。そのため、地図の地点数は話者数より若干少なくなっている。

2. 淡路方言のアクセント

2.1 淡路方言のアクセント体系

淡路方言のアクセント体系は、次の拍⁵を下げる働きを持つ下げ核⁶(以降単に「核」と、高

⁴ 以前は福宜田(1986)に従い富島を北淡から分けていたが、これまでの調査から、富島は周辺地域と、少なくともアクセントや語彙の差は大きくなく周囲と連続態をなすことが分かったため、本稿では北淡に含めて扱う。なお、山本・飯野(1962)が洲本方言として調査しているのは由良であり、洲本方言の代表とするのには問題があると考えられる。筆者も、中澤(2011a, 2011b)では由良を洲本として扱ったが、適切ではなかった。

⁵ アクセントの長さを構成する単位(上野善道 2002: 2)で、淡路方言ではモーラが拍となる。

⁶ 上野善道(1992: 11)。

く始まる高起式，低く始まる低起式⁷の2式からなる，現代京都方言と同様の体系である。高起式を H，低起式を L，核のある拍の位置を数字（核が無い場合は 0）で表し，アクセント型を示す。例えば H1 は高起式で 1 拍目に核があることを表す（H1 は[HL...]。H は高，L は低）。核の位置を語末から表す場合は H-2 のように数字の前にマイナスを付ける（H-2 は[H...HL]）。

アクセントや語彙の分布には(1)の3つのパターンが考えられる。

- (1) a. 全島で同じ型が現れる。
- b. 複数の型が不規則に現れ，地域差は見られない。
- c. 複数の型が現れ，地域的な偏りが見られる。

アクセントにおけるそれぞれの具体例を挙げる。

(2) (1a)の具体例

H0: 蚊(か)，娥(が)，気(き)，具(ぐ)，子(こ)，差(さ)，巢(す)，血(ち)，戸(と)，間(ま)，実(み)，…

味(あじ)，飴(あめ)，風(かぜ)，傷(きず)，霧(きり)，黴(しわ)，庭(にわ)，蓋(ふた)，水(みず)，…

体(からだ)，車(くるま)，氷(こおり)，魚(さかな)，畳(たたみ)，隣(となり)，二十日(はつか)，…

紫陽花(あじさい)，関係(かんけい)，新鮮(しんせん)，友達(ともだち)，泥棒(どろぼう)，…

H1: 背(せ.背丈)，名(な)，値(ね)，葉(は)，歯(は)，刃(は)，日(ひ)，矢(や)，…

犬(いぬ)，渦(うず)，親(おや)，紙(かみ)，鹿(しか)，寺(てら)，虹(にじ)，村(むら)，山(やま)，…

鮑(あわび)，命(いのち)，姿(すがた)，力(ちから)，涙(なみだ)，二十歳(はたち)，箒(ほうき)，…

蝙蝠(こうもり)，椎茸(しいたけ)，親切(しんせつ)，…

H3: 金持ち(かねもち)，雷(かみなり)，九日(ここのか)，蒟蒻(こんにやく)，蠟燭(ろうそく)，…

L0: 絵(え)，尾(お)，木(き)，字(じ)，酢(す)，田(た)，手(て)，根(ね)，火(ひ)，目(め)，湯(ゆ)，…

海(うみ)，傘(かさ)，肩(かた)，銭(ぜに)，空(そら)，箸(はし)，針(はり)，松(まつ)，味噌(みそ)，…

兎(うさぎ)，蛙(かえる)，虱(しらみ)，鼠(ねずみ)，裸(はだか)，左(ひだり)，蓬(よもぎ)，…

薬屋(くすりや)，新聞(しんぶん)，算盤(そろばん)，長靴(ながぐつ)，針金(はりがね)，…

L2: 秋(あき)，陰(かげ)，声(こえ)，猿(さる)，鍋(なべ)，葱(ねぎ)，鱧(はも)，蛇(へび)，窓(まど)，…

戦(いくさ)，葉(くすり)，鹽(たらい)，鉛(なまり)，秤(はかり)，歯茎(はぐき)，百足(むかで)，…

紫(むらさき)，(絵日記(えにつき)，三月(さんがつ)，野兎(のうさぎ))⁸…

L3: 嘔吐(うそつき)，出しゃばり(でしゃばり)，坊々(ぼんぼん.良家の息子)，松茸(マツタケ)⁹，…

H3 は他にも「足跡(あしあと)」，「足音(あしおと)」，…など，L3 は他にも「おしゃべり」，「缶蹴り(かんけり)」，…などいくつか挙げられるが，H2 で安定した語は見られない。2.2 で扱うよ

⁷ 北淡(富島)を中心に，中程度の高さから始まる音調[M(M)L...]もしばしば聞かれる(Mは中)。

⁸ 「絵日記，三月，野兎」は調査人数の不足によりこの型で安定しているとは断言できない。

⁹ 多くの話者が「マツタケ」の形で答えている。「マツタケ」でも多くL3で，「マツダケ」ではL2が多い。

うに、北淡を中心に核の位置にずれが見られるため、有核語は全島を通じて安定しているものが少ない（4拍L3も北淡ではL2で現れる傾向がある）。

3拍語まででは少なくともこの(1a)型が主流である。筆者の調査データでは、1拍名詞の60語中45語、2拍名詞の596語中442語が該当する。特に、現代諸方言と文献資料から設定される「類」（日本語祖体系のアクセントの対立グループ）の所属語彙である類別語彙（上野善道2006: 2-6、松森晶子ほか2012: 191）を中心に対応が見られ、2拍名詞に立てられる第1類、第2類、第3類、第4類、第5類（金田一春彦1974: 63-64）の5つの類が、淡路方言ではそれぞれ概ねH0, H1, H1, L0, L2で現れ、第2類と第3類が統合している（「II-1/2・3/4/5」と表す）。京都市方言や大阪市方言も淡路方言と同様であり、このようなII-1/2・3/4/5という統合を示す方言を「中央式諸方言」と呼ぶ（上野善道1985: 223）。

(1a)の安定型に属する語で注目すべきものをいくつかあげる。参考のため、中井幸比古(2002)より、中央式諸方言のアクセント資料を(cf. 〃)で併せて記す¹⁰。

(3) 胃(い)H0(cf. 1. 0s 若. <周>0), 津(つ.地名)H0(cf. L0, 0 若), 糞(くそ)H1(cf. 0. 1), 東風(こち)L2(cf. 〃), 辞書(じしょ)H1(cf. L2, 1. L0s, <周>1), 地図(ちず)H1(cf. L2, 1s¹¹), 薔薇(ばら)H1(cf. 1. 0 若, <周>L2s, 0s), 豆(まめ)H1(cf. L2, 1s<周>1), 桂(かつら)H1(cf. 0. 1 若¹²), 昨日(きのう)H1(cf. 1. <周>2p), 襷(たすき)L2(cf. 1. L2s 若, <周>L2p), 狸(たぬき)L2(cf. 1. L2 若, <周>L2p), 卵(たまご)L2(cf. 1. L2 若, <周>L2s¹³), 手紙(てがみ)L0(cf. 0. <周>1s¹⁴), 茄子び(なすび)L2(cf. 1. <周>L2, L0s¹⁵), 名札(なふだ)H1(cf. 0. <周>1s¹⁶), 柱(はしら)L2(cf. 1. <周>L2s¹⁷), 昔(むかし)L0(cf. 0. L0 若, <周>L2s¹⁸), 蟋蟀(こおろぎ) H1(cf. 0. 1 若. <周>1), …

おおむね周辺部のアクセントと一致する傾向にあり、近畿中央部の若年層に一致するように見えるものも、詳しく調べると周辺部にも見られるアクセントであることから、淡路方言のアクセントは中央式のうち周辺部のアクセントに属すると言えそうである。

全島で同一のアクセント型が現れる語が主流をなす一方で、(1b), (1c)のように複数の型が現れる語もある。(4)に(1b)の具体例を中央式諸方言のアクセント資料と併せて挙げる。

¹⁰ cf. の表記について解説する。高起式のHは省略。sは複数の型の併用で劣勢のもの。若は近畿中央部の若年層（昭和40年代生まれ）に見られるもの。<周>は周辺部に見られるアクセント。pは周辺部の複数地点に見られる型。<周>で無印のものは周辺部に広く見られる。一般に、周辺部のアクセントの方が古形と見られる。

¹¹ CDによれば、高知市、旧野洲郡祇王村以外の周辺部（徳島市、小野市、明石市、西牟婁郡すさみ町江住、旧葛野郡中川村）ではH1（中川村はL2との併用）であり、周辺部ではL2よりH1が主流と見られる。

¹² 高知市、小野市、明石市 H1（徳島市、すさみ町江住、旧祇王村、旧中川村 H0）。

¹³ 徳島市、小野市、明石市、すさみ町江住、旧祇王村、旧中川村 L2（高知市 H1）であり、<周>L2 か<周>1s か。

¹⁴ すさみ町江住 L0（徳島市 H1, 他の周辺部 H0）。

¹⁵ 高知市 L0, 徳島市、小野市、明石市、すさみ町江住 L2, 旧祇王村、旧中川村 H1。

¹⁶ 高知市、徳島市、小野市、明石市、すさみ町江住 H1（旧祇王村、旧中川村 H0）であり、<周>1 (p) か。

¹⁷ 高知市、徳島市、小野市 L2, 明石市、すさみ町江住 L2, H1, 旧祇王村、旧中川村 H1 であり、<周>L2p か。

¹⁸ 高知市 L2, 徳島市、小野市、明石市、すさみ町江住 L0, 旧祇王村、旧中川村 H0（強調でL0も）であり、周辺部（特に西側）ではL0が主流か。

(4)¹⁹肌理(きめ)H0,H1(cf. 1), 葦(こら)H0,H1(cf. 1, 0), 沼(ぬま)H0,H1(cf. 1, 0s), 喪主(もしゅ)H1,L0(cf. 1, L0), 扉(とびら)H1,L2,(H0)(cf. 1, 0 若.<周>L2p), 斧(おの)H0,H1,L0,L2(cf. 0, L0), 狩り(かり)H0,H1,L0,L2(cf. 0, 1s), 顎(あご)L2,(H1)(cf. L2), 当て(あて.頼り)L2,(H1)(cf. 1, 0²⁰), 亀(かめ)L2,(H1)(cf. L2, <周>1), 鴨(かも)L2,(H1)(cf. L2, 1), 絹(きぬ)L2,(L0)(cf. L0, <周>L2), 牙(きば)L2,(H1)(cf. 1, L2), 管(くだ)L0,(L2)(cf. L0), 愚痴(ぐち)H1,(H0,L2)(cf. 0, L2, L0), 鯛(こち)H0,(L2)(cf. —), 瘤(こぶ)L2,(H1,L0)(cf. 1, L2 若²¹), 地味(じみ)H0,(H1,L2)(cf. L2, L0²²), 素手(すで)L2,(H1,L0)(cf. L2), 点(てん)H1,(H0)(cf. 0, <周>1p), 謎(なぞ)H0,(L0,L2)(cf. 1, L2, L0s, 0 若), 山羊(やぎ)H1,(L2)(cf. 0, 1s, <周>L2), 夜(よる)L0,(L2)(cf. L2, L0s, <周>L0p), 汗疹(あせも)H2,(L2)(cf. L2, <周>2s²³), 夫(おと)H0,(H1,L0)(cf. 0²⁴), 蔓(かずら)L2,(H1)(cf. —), 拳(こぶし)L2,(H0,H1,H2)(cf. 1, 0s, <周>L2p), 小指(こゆび)L2,(H1)(cf. 1, <周>L2s, 2s²⁵), 榮螺(さざえ)L2,(H1,H2)(cf. 1, L2s²⁶), 散歩(さんぽ)L0,(H0)(cf. 0, <周>L0p), 始末(しまつ)H1「儉約,吝嗇」;L0「片付け」(cf. L0, 1s「処分」), 簾(すだれ)H0,(H1, L0)(cf. 1, 0 若, L2 若), 血豆(ちまめ)H0,(L0)(cf. 0, L2s, <周>L0p), …

複数の型が現れる場合にはいくつか傾向が見られる。H0—H1 や L0—L2 のように同じ式で核の有無が交替する例, H1—L2 のように有核型で式が交替する例が中心で, 若干 H0—L0 のように無核型で式が交替する例がある。H1—L0 や H0—L2 のように式と核の有無がともに交替する例は稀である。「喪主」H1,L0, 「始末」H1;L0 (意味による使い分け)は漢語あるいは漢語相当であることが背景にあるか (2 拍や 1+2 拍の漢語では L2 が少ない²⁷)。「鯛」H0,(L2)は H0 が本来で, L2 は動物に多い L2 への類推か同音の「東風」L2 への牽引が働いたものと思われる。「斧」のように 2 拍名詞が取り得るほぼ全ての型が現れる例もあるが, H0—L0 のような式の交替からそれぞれさらに核の有無の異なる H1, L2 が生じる, または H0—H1 のような核の有無の交替から式の異なる L0, L2 が生じる (あるいはその逆) という 2 段階の変化があったか。

(1b)の語は, 中央式諸方言全体でも複数の型が見られる場合が多い。特に, 中央部と異なる型が周辺部に現れる場合, (3)と同様に淡路方言は周辺部と一致する傾向が見られる。

優勢な型が 1 つの場合, 少数派の出現数によっては(1a)と連続体をなす (劣勢な型がごく少数にとどまる場合は(1a)に含めている)。(1b)の例は, 日常語でないものが, 標準語の影響を受けるなどして本来のアクセントを失いつつあるものが多いと見られ, どの地点でも変化が生じる可能性があるため, 地域差は現れない。

調査データに基づき, 実際の分布図をいくつか示す。

¹⁹ 出現数に極端な偏りがない場合は, で併記し, 数に偏りがある場合, 少数派のものを () 内に記した。

²⁰ 徳島市 L2 (高知市, 旧祇王村 H0, 小野市, 明石市, すさみ町江住, 旧中川村 H1)。

²¹ 高知市, 徳島市, 小野市, すさみ町江住 L2 (明石市, 旧祇王村, 旧中川村 H1)。

²² 徳島市, 旧祇王村 H0, 高知市, すさみ町江住 H1 (小野市, 明石市 L2, 旧中川村 L0)。

²³ 高知市, すさみ町江住 H2, 徳島市 H2,H0, 小野市, 明石市, 旧祇王村, 旧中川村 L2 であり, <周>2p か。

²⁴ 徳島市, 小野市 L0 (他の周辺部 H0)。

²⁵ 徳島市, 旧中川村 H2, 高知市, 小野市, 明石市, 旧祇王村 L2 (すさみ町江住 H1) であり, <周>L2p, 2p か。

²⁶ 周辺部 (高知市, 徳島市, 小野市, 明石市, すさみ町江住, 旧祇王村, 旧中川村) 全て H1。

²⁷ 午後(ごご), 地下(ちか), 理科(りか)や故郷(こきょう), 胡椒(こしょう), 左右(さゆう), 四角(しかく)など L2 をと(り得)る語もあり皆無というわけではない。

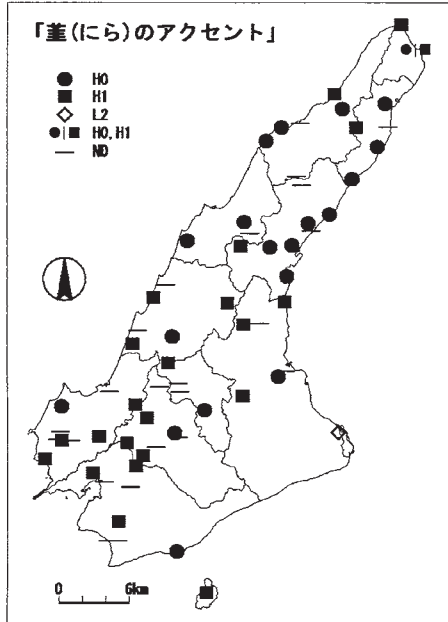


図2 葦(にら)のアクセントの分布

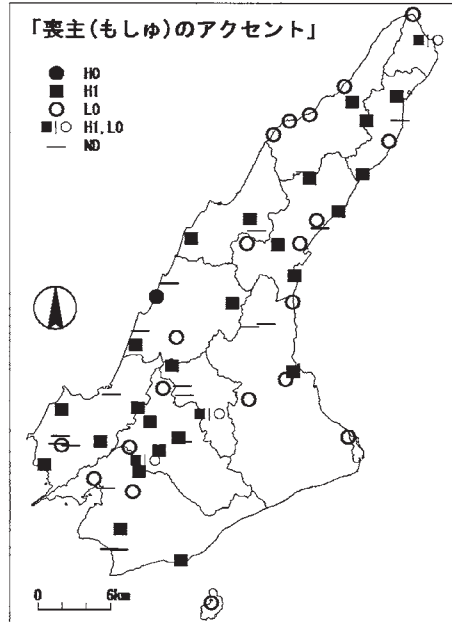


図3 喪主(もしゆ)のアクセントの分布

「葦」はゆるやかに北部H0/南部H1の傾向があると見て(1c)と見なせるかもしれない。

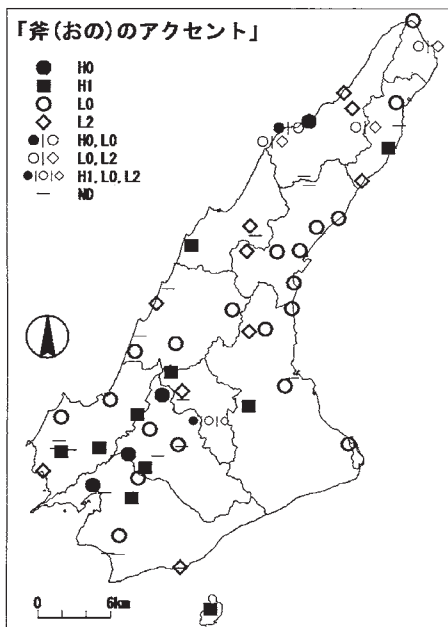


図4 斧(おの)のアクセントの分布

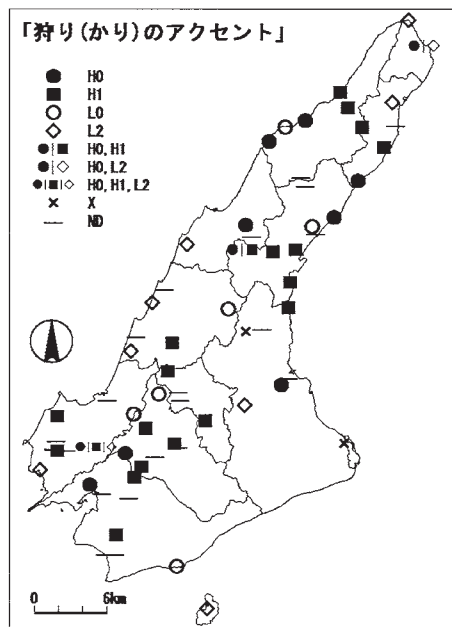


図5 狩り(かり)のアクセントの分布

「斧」はややL0が多く分布も広い。南部に固まって見られるH1は地域特徴か。

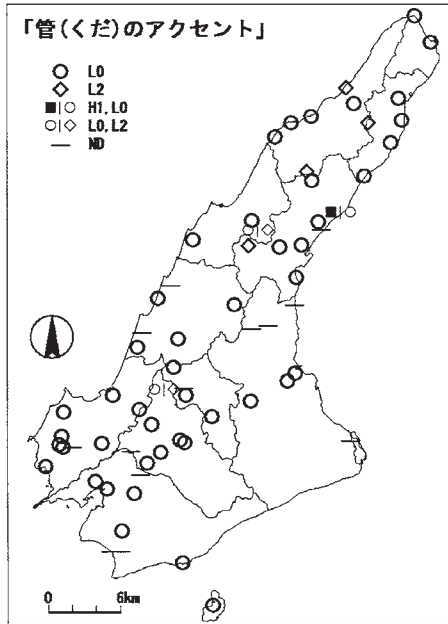


図6 管(くだ)のアクセントの分布

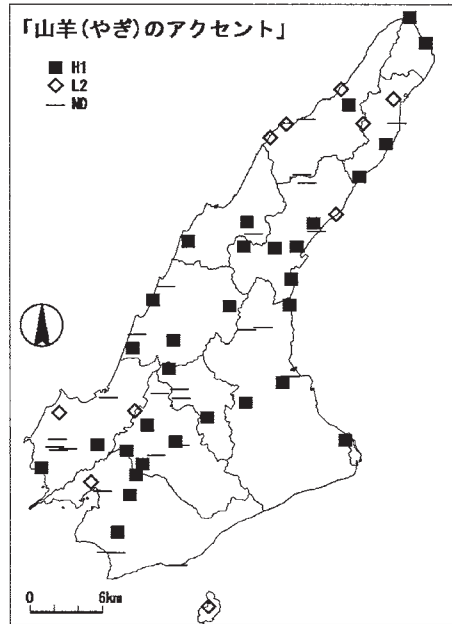


図7 山羊(やぎ)のアクセントの分布

「管」のL2は北部に、「山羊」のL2は周辺部に多いか。ともにL2の出現数はかなり少ない。

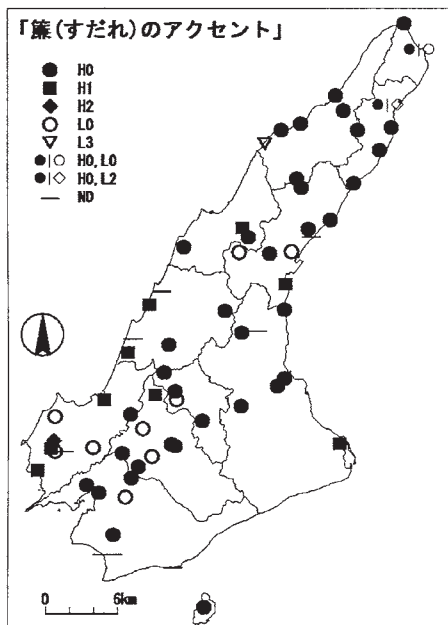


図8 簾(すだれ)のアクセントの分布

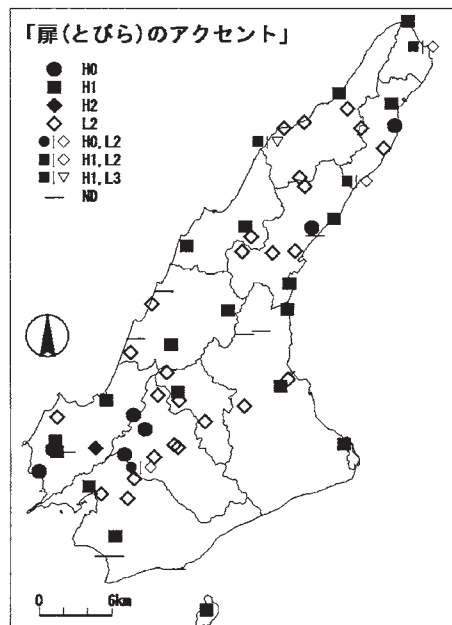


図9 扉(とびら)のアクセントの分布

「簾」, H1, L0は南部にやや多いか。「扉」, 南部の一部にH0がまとまって見られる。

2.2 名詞のアクセント地域差

(1a, b)では地域差が見られないため淡路方言を区分することはできないが、(1c)は島内で地域的な違いが現れるものであり、境界線を引けるため、淡路方言の下位区分の指標となり得る。

以下、筆者が(1c)に分類した語例に基づき、淡路方言の地域差について論じる。

淡路方言の名詞のアクセントに見られる地域差には大きく(5)の2つのグループがある。

- (5) a. 周圏分布…島の周辺部、あるいは中央部に同一の型が見られる。「A{B}A」型
 b. 南北分布…島の南北で対立する。「A/B」型

(5a)は周辺部 A、中央部 B の分布で「A{B}A」あるいは「A{B}」と表記する。(5b)は北部 A、南部 B の分布で「A/B」と表記する。他にも東西分布などが考えられるが、本稿の資料の範囲では東西分布に該当する語はない(周圏分布のうち、西寄りに中心が来るものがあるが、それも周圏分布に含めた)。A と B の勢力に大きく差が見られる場合もある。

(5a)の主な対応は H1/H2 (H2{H1}H2), (5b)の主な対応は L0/L2 (L2//L0), H1/L2 (L2//H1)である (L0/L2, H1/L2 は(1b)にも見られる)。これらの対応を示す語は 10 語以上とある程度まとまった数が見られるが、これ以外の対応は(調査不足もあり)数語程度にしか見られない。

(1c)のうち、最も規則的な対応がある H1/H2 を含む(5a)に相当する例から見ていく。

表 1 H1/H2 の周圏分布を示す語群 (1) ²⁸

地点名	小豆(あずき) ²⁹	頭(あたま)	嵐(あらし)	入れ歯(いれは)	団扇(うちわ)
岩屋	H2p	H2p	H2p	H2p	H2p
東浦	H2p	H1p(,H2?,L2?)	H1p,H2p	H2p	H1p(,L2)
北淡	H1p(,H2p)	H2p(,H1p)	H1p(,H2?,L2?)	H1p(,H2)	H1p(,H2p,L2?)
津名	H1p,H2p	H2p	H1p(,H2?)	H2p	H1p(,H2?)
一宮	H2p(,H1)	H1	H1p(,H2)	H2p	H1p,H2p
洲本	H2p	H2p	H2p(,H0,H1)	H2p	H1,H2,L2
[由良]	H2	H2	H2	H2p	H2
五色	H2p	H1,H2	H2p	H2p	H2p(,H1)
緑	H2p	H2p	H2p(,H1)	H2p	H2p
三原	H2p	H2p	H2p(,H1s)	H2p	H2p
西淡	H2p(,H1?,L2?)	H2p	H2p(,H1?)	H2p	H2p
南淡	H2p	H2p	H2p(,H1?)	H2p	H2p
[福良]	H2p	H2p	H2p(,H1)	H2	ND
[沼島]	H2p	H2p	H1,H2	H2	H2
(京阪)	1, L2s, <周>2s, L2s	1, L2 若, <周>2	1, <周>2, 0s	1, L2 若, <周>2	1, <周>2

²⁸ 以下の表の表記法について説明する。p は複数の話者で確認した型。()内は劣勢の型。s は複数の話者に見られるがかなり少数派の型。?は原則 1 人のみで見られるかなり少数派の型。無印は 1 人でのみ確認した型。ND はデータ無し。()内の型は, (Xp)>(,Xs)>(,X?)の順により劣勢になる。(,X)は調査人数不足のため?を付けるまでには至らないもの。()内の前の型は記号の意味から p を付ける必要はないが、複数に見られることを明示するためこの場合も p を付けた。イタリックと太字は対応形の強調。最下段の(京阪)は中央式諸方言のデータで表記法は(3), (4)と同じ。

²⁹ 「小豆」, <周>は高知市, 徳島市 L2, 小野市, 明石市, すさみ町江住, 旧祇王村, 旧中川村 H2 であり, 2s の s 不要か。

表 2 H1/H2 の周囲分布を示す語群 (2)

地点名	男(おとこ)	表(おもて)	鏡(かがみ)	敵(かたき)	刀(かたな)
岩屋	H2p	H2p	H2p	H2p,(H1?)	H2p,(H1)
東浦	H2p,(H1)	H2p,(H1)	H2p	H2	H1p,L2p,(H2)
北淡	H1p,(H2p)	H1p,H2p	H1p,(H2?)	H2p,(L2)	H1p,(H2?,L2?)
津名	H2p,(H1s)	H2p,(H1p)	H2p,(H1s)	L2	L2p,(H1p,H2)
一宮	H2p,(H1p)	H2p,(H1p)	H2p,(H1)	H1	H1p,H2p
洲本	H2p	H2p,(H0?)	H2p	H1	L2p,(H2)
[由良]	H1,L2	H2	H2	H2	H2
五色	H2p	H2p,(H1)	H2p	H2p	H2p
緑	H2p	H2p	H2p	H2	H2p
三原	H2p	H2p	H2p	H2p	H2p
西淡	H2p,(H1?)	H2p	H2p	H2p	H2p
南淡	H2p	H2p	H2p	H2	H2p
[福良]	H2p	H2p	H2p	H2	H2
[沼島]	H2p	H2p	H2p	H2	H2p
(京阪)	1, <周>2	1, <周>2	1, <周>2	1, 0 若, <周>2p	1, L2 若, <周>2p

表 3 H1/H2 の周囲分布を示す語群 (3)

地点名	毛抜(けぬき)	言葉(ことば)	暦(こよみ) ³⁰	四月(しがつ)	地獄(じごく)
岩屋	H2p	H2p,(H1?)	H2p	H2p,(H1)	H2p
東浦	H2p,(H0?)	H1p,(H2p)	H2p	H2p,(H1)	H2p,(H0)
北淡	H1p,(H0s,H2,L2)	H1p,(H2p)	H1p,(H2s)	H1p,(H2?)	H1p,(H0?,H2?)
津名	H2p,(H1s)	H1p,(H2p)	H1,H2	H2p,(H1p)	H2p,(H0p,H1p)
一宮	H2p,(H1p)	H1p,(H2p)	H1,H2	H1p,H2p	H2p,(H0,H1)
洲本	H2p,(L2)	H2p	H2p	H2p	H0p
[由良]	H1	H2	H2	H2	H0,H2
五色	H2p	H2p,(H1)	H2p	H2p	H2p,(H0)
緑	H2p	H2p,(H1)	H2p	H2p	H0,H2
三原	H2p,(H0?)	H2p	H2p,(H1?)	H2p	H2p
西淡	H2p	H2p	H2p	H2p	H2p,(H0,H1)
南淡	H0p,H2p	H2p,(H1)	H2p	H2p	H0p,H2p
[福良]	H2p	H2p	H2p	H2	H2
[沼島]	H2p	H2p,(H1)	H2p	H2p	H2p
(京阪)	1, <周>2	1, <周>2	1, <周>2, L2	1, <周>2	1, L0 若, <周>2

表 4 H1/H2 の周囲分布を示す語群 (4)

地点名	宝(たから)	助(たすけ)	袂(たもと)	手当(てあて) ³⁰	情(なさけ)
岩屋	H2p	H2p	H2p	H2p	H2p,(H1)
東浦	H1p,(H2,L2?)	H2,(H1?,L2?)	H2p	H1	H1p,H2p,(L2?)
北淡	H1p,(H2?,L2?)	H1,H2	L2p	H1p	H1p,(H2p,L2?)
津名	H1p,(H2?)	H2	H1	H1	H2
一宮	H1p,H2p	H1	H1,H2	H1	H1p
洲本	H2p	H2	H2p,(H1?)	H1,H2	H2p
[由良]	H2	H1	H2	H1	H2
五色	H2p,(L2)	H2	H2p	H2p	H2p
緑	H2p	ND	H1,H2	H1	H1,H2
三原	H2p	H2	H2p	H2p	H2p,(H1s)
西淡	H2p	H2	H2	H2	H2p,(H1?)
南淡	H2p,(H1)	H2p	H2	H2	H2p
[福良]	H2	H2	H2	H2	H2p,(H1)
[沼島]	H2	H1	H2p	H1	H2p
(京阪)	1, <周>2	1, 0, <周>2p	L2, <周>2	1, <周>0s, 2s	——

³⁰ 「暦」, <周>の L2 削除か (周辺部は全て H2)。「手当て」, <周>は旧祇王村 H1, 旧中川村 H0 以外の周辺部 (高知市, 徳島市, 小野市, 明石市, すさみ町江住) H2 であり, 2s の s 不要か。

表 5 H1/H2 の周囲分布を示す語群 (5)

地点名	二月(こがつ)	袴(はかま)	東(ひがし)	光(ひかり)	響(ひびき)
岩屋	H2p	H2p	H2p	H2p	H2p
東浦	H2p(H1)	H1,H2	H2p(H1?)	H1p(H2?,L2?)	H1
北淡	H1p(H2p)	H1,H2,L2	H1p(H0?,H2?)	H2p	H2p(H1)
津名	H1	H1	H2p(H1)	H1	H1,H2
一宮	H2	H1	H1p	H1	H1
洲本	H2p	H2	H2p	H2	H2
[由良]	H2	H0	H2	H2	H2
五色	H2p	H2p	H2p	H2p	H2p
緑	H2	H2	H2p	H2	H2
三原	H2p	H2p	H2p	H2p	H2p
西淡	H2p	H2	H2p	H2	H2
南淡	H2p	H2p	H2p	H2p	H2p
[福良]	H2p	H2	H2p	H2	H2
[沼島]	H2p	H1	H2p	H2	H2
(京阪)	1, <周>2	1, <周>2, 0s	1, <周>2	1, <周>2	1, 0s 若, <周>2

表 6 H1/H2 の周囲分布を示す語群 (6)

地点名	襖(ふすま)	麓(ふもと)	娘(むすめ)	紅葉(もみじ)	夜中(よなか)
岩屋	H2p	H2p	H2p(H1?)	H2p(H1)	H2p
東浦	H1p	H1p,H2p	H2p(H1?)	H2p(H1)	H2p
北淡	H1p	H1p	H1p(H2p)	H1p(H2p)	H2p
津名	H1p	H1,H2	H2p(H1s)	H1p(H2)	H2
一宮	H1p(H2)	H1	H2p(H1p)	H1p,H2p	H1
洲本	H1,H2,L2	H2	H2p(H1?)	H2p	H2p
[由良]	H2	H2	H2p	H2	H2
五色	H2p(H1)	H2p	H2p	H2p	H2p
緑	H2p	H2	H2p	H2p	H2
三原	H2p	H2p	H2p	H2p(H1?)	H2p
西淡	H2p	H2p	H2p	H2p(H1p)	H2p(H0)
南淡	H2p	H2p	H2p	H2p	H2
[福良]	H2	H2	H2p	H2	H2
[沼島]	H2	H1	H2p	H2p	H2
(京阪)	1, <周>2	1, 0 若, <周>2, L2s	1, <周>2	1, <周>2p	1, L2 若, <周>2

表 7 H1/H2 の周囲分布を示す語群 (7)

地点名	女(おんな)	刃物(はもの)	袋(ふくろ)	籠(かごしろ)	全体の傾向
岩屋	H2p	H2p	H2p(H1?)	H2p(H1?)	H2
東浦	H2p	H1p(H2)	H1p(H2,L2)	H1p(H2)	H2(H1)
北淡	H1p(H2s)	H1p	H1p(H2p)	H1p(H2s)	H1
津名	H2p(H1s)	H1	H1p(H2p)	H1p	H1,H2
一宮	H2p(H1?)	H1	H1p(H2)	H1p(H2)	H1,H2
洲本	H2p	H2p	H2p(H1)	H1p,H2p	H2
[由良]	H2p	H1	H2p	H2p	H2
五色	H2p	H2p(H1)	H1p	H1p	H2
緑	H2p	H2	H1p(H2)	H1p	H2
三原	H2p	H1p(H2)	H1p(H2?)	H1p(H2?)	H2
西淡	H2p	H2p(H1)	H1p(H2?)	H1p(H2?)	H2
南淡	H2p	H1	H1p(H2)	H1p(H2)	H2
[福良]	H2p	H2	H2p	H2p	H2
[沼島]	H2p	H2	H2p	H2p	H2
(京阪)	1, <周>2	1, <周>2	1, <周>2	1, <周>2	—

現淡路市の地域を北部、現洲本市の地域を中部、現南あわじ市の地域を南部と呼ぶことにす

ると、岩屋以外の北部が H1，中・南部および岩屋が H2 という対応が見られる。ただし、「袋」，「筵」では周辺部（岩屋，由良，福良，沼島）以外の南部を含む広い地域で H1 が見られる（cf. 中澤 2013: 196）。この H1/H2 の対応が，(2)に H2 の語がない要因の一つとなっている。中・南部で H2 の語は，程度の差はあれ北部で H1 が現れ，全島で安定して H2 となる語はほとんど見られない。これらの語は，近畿中央部で H1，周辺部で H2 という分布を示す。

周囲分布を示す，ある程度まとまった数が見られるものとして H0/L0 の対応が挙げられる。

表 8 H0/L0 の周囲分布を示す語群³¹

地点名	溝(みぞ)	電話(でんわ)	二日(ふつか)	手拭(てぬぐ)い	風船(ふうせん)
岩屋	H0p	H0p	H0p	H0p	H0p
東浦	H0p	H0p	H0p	H0p	H0p
北淡	H0p	H0p	H0p	H0p	H0p
津名	H0p	H0p	L0p(H0p)	H0p	H0p
一宮	H0p	H0p(L0?)	L0p	H0p	H0p(L0)
洲本	H0p,L0p	L0p	L0p	H0p	L0p
[由良]	L0p	L0p(H0)	L0p	H0p	L0p
五色	H0p	L0p(H0)	L0p	H0p(L0p)	L0p
緑	H0p(L0)	L0p	H0p(L0)	H0p(L0)	L0p
三原	H0p(L0s)	H0p,L0p	L0p	H0p,L0p	L0p
西淡	H0p,L0p	H0p,L0p	L0p(H0p)	H0p	L0p
南淡	H0p	L0p(H0)	H0p	H0p	L0p
[福良]	L0p	H0p	L0p(H0)	H0,L0	L0p
[沼島]	H0p	H0p	H0p(L0)	H0	H0p
(京阪)	0	0, 1s, L0s, <周>L2p	0	0	0, <周>L0s

H0/L0 は岩屋を含む北部が H0，沼島を除く中・南部が L0 という傾向が見られる。

その他の周囲分布の対応は散発的であるが，4 拍語の(H1{H2}H1)，(H2{H3}H2)，(L3{L2}L3) はある程度まとまった数が見られる（ただし全体的に調査不足）。

表 9 その他の周囲分布を示す語群 (1)

地点名	蛤(はまぐり)	鼻水(はなみず)	嘴(くちばし)	唇(くちびる)	大人(おとな)
岩屋	H1p	H2p	L3p	L3p	L0p
東浦	H1p(H2)	H2p	L2p(L3p)	L2p(L3p)	L0p
北淡	H2p	H3p(H2p)	L2p(L3p)	L2p(L3p)	L0p(L3?)
津名	H1p(H2p)	H3p(H2p)	L2p,L3p	L3p(L2p)	L2p(L0p)
一宮	H1p(H2)	H2p(H3p)	L2p,L3p	L2p,L3p	L2p(L0p)
洲本	H1p	H2p	L3p	L3p	L2p
[由良]	H1p	H2p	L3p	L3	L2p
五色	H1p	H2p	L2p,L3p	L3p	L2p(L0)
緑	H1p(H2?)	H2p	L3p(H3)	L3p	L2p(L0)
三原	H1p	H2p	L3p	L3p	L2p(L0?)
西淡	H1p	H2p	L3p	L3p	L2p(L0?)
南淡	H1p	H2p	L3p	L3p(H2?)	L2p(H2,L0?)
[福良]	L2	H2p	L3p	L3p	L2p
[沼島]	H1p	H2p	L3p	L3p	L0p(L2)
(京阪)	1, <周>L2 若, L3s	2, 0, L2s	L3, <周>L2s, 3s	3, L3, <周>2s	L0, <周>L2p

³¹ 「溝」，徳島市 L0。「電話」，小野市 L0 も。「二日」，淡路以外に L 式見られず。「二日」は沼島でも L0 が見られ，南北分布と見るべきか。語によって分布の違いがあるが，北部で H0 優勢，(沼島以外の)中・南部で L0 優勢（ただし一宮，南淡はこのデータだけではやや不明瞭）。

表 10 その他の周囲分布を示す語群 (2)

地点名	椅子(いす)	昼飯(ひるめし)	俄か雨(ソバエ・ソーバエ)	担い桶(ニナイ・ニーナイ)
岩屋	H0p	H3p	H-2p	H-2p
東浦	H0p	H3p	H-3p(H-2)	H-3p
北淡	H0p,H1p	H3p(H0?)	H-3p(H-2?)	H-3p(H-2)
津名	H0p,H1p	H0p(H3p)	H-3p	H-3p(H-0)
一宮	H1p(H0)	H3p(H0p)	H-3p(H-4p)	H-3
洲本	H1p(H0)	H0p	H-3p	H-3p
[由良]	H0p	H0,H3	H-2p(H-3?)	H-2
五色	H1p	H0p(H3)	H-2p(H-3)	H-3p
緑	H1p	H0p	H-2p(H-3)	H-0,H-2
三原	H1p	H0p	H-2p(H-3s)	H-2
西淡	H1p	H0p(H3)	H-2p(H-3)	H-2p(H-3p)
南淡	H1p	H0p	H-2p(H-3)	H-2
[福良]	H0,H1	H0,H3	H-2	H-2
[沼島]	H0p	H3p	H-2p	H-2
(京阪)	0, <周>1p	3, 0 若	——	——

表 11 その他の周囲分布を示す語群 (3)

地点名	火箸(ひばし)	諺(ことわざ)	草鞋(わらじ)	蒟(にんにく)
岩屋	H1p(L2)	H0p(H3)	L0p(H0)	H3p
東浦	H1p(H2?,L2?)	H0p	L2p	H3p(H0)
北淡	L2p(H1?,L3?)	H0p	H1p(L0p)	H3p(H1p)
津名	H1p,L2p	H0p	H0p,L0p	L0p(H0p,H2,H3)
一宮	L2p(H1p)	H0p(H3)	H0p(H1,H2)	L0p(H3?,L3?)
洲本	L2p(H1)	H0p	H0p	L0p(L3?)
[由良]	L2p	H0	H0	H3p
五色	L2p	H0p(H3)	H0p(H2)	L0p
緑	L2p(H1)	H0p(H3)	H0p	L0p
三原	L2p	H0p(H3s)	H0p	L0p
西淡	L2p(H1?)	H0p(H3)	H0p	L0p
南淡	L2p(H1)	H3p(H0p)	H0p	L0
[福良]	L2p(H1)	H0p	L0	L0p
[沼島]	H1p	H0,H3	L0	H3p
(京阪)	1	0	0	3, 0s

次に、(5b)の南北分布を示す語として、ある程度まとまって見られる L0/L2 から挙げる。

表 12 L0/L2 の南北分布を示す語群 (1)

地点名	穴(あな)	栗毬(いが)	崖(がけ)	殻(から)	皮(かわ)
岩屋	L0p(L2)	L2p(H1)	L2p	L2p(H1)	L2p(L0?)
東浦	L2p	L2p(H1)	L2p	L2p(L0)	L0p,L2p
北淡	L0p,L2p	H1p,L2p	L2p(L0?)	L2p(L0?)	L2p(L0p)
津名	L0p(L2)	H1p,L2p	L2p	L2p(H1p,L0p)	L0p(L2?)
一宮	L0p,L2p	H1p(L2)	L2p	L2p(H1,L0)	L2p(L0p)
洲本	L0p	H1p,L2p	L2p	L0p(L2p)	L0p
[由良]	L0p	L2	L0,L2	L0	L0p
五色	L0p	L2p(H1)	L0p(L2)	L0p	L0p(H1)
緑	L0p	L2p(L0)	L2p(L0)	L0p	L0p
三原	L0p	L0p,L2p	L0p,L2p	L0p	L0p
西淡	L0p	H1p,L0p,L2p	L2p(L0p)	L2p(H1,L2)	L0p
南淡	L0p	L0p(L2)	L0p(H0)	L0p	L0p
[福良]	L0p	L0p(H1)	L0	L0p	L0
[沼島]	L0p	L0p(H0)	L0,L2	L0p	L0
(京阪)	L0	L2, <周>L0p	0, L2, 1s, <周>L2	L0, <周>L2p	L0, <周>L2s

表 13 L0/L2 の南北分布を示す語群 (2)

地点名	岸(さし)	屑(くず)	縦(たて)	束(たば)	玉(たま)
岩屋	H0,H1,L0	L2p,(L0)	L2p	L2p,(L0)	H1p,L2p
東浦	H1p,L0p,L2p	L0p,(L2)	L0p,(L2p)	L0p,(L2)	L2p,(L0)
北淡	H1p,L2p,(H0p,L0)	L0p,L2p	L0p,(L2?)	L2p,(L0p)	L2p,(L0s)
津名	L2p,(H1p,H0,L0)	L0p,L2p	L0p	L0p	L0p,(L2?)
一宮	L2p,(H0,L0)	L0p,(L2)	L0p	L0p,(L2)	L2p,(L0)
洲本	L0p,(L2?)	L0p,(L2)	L0p,(L2?)	L0p	L0p,(H1)
[由良]	H0	L0	L0	L0p	L0
五色	L0p	L0p,(L2)	L0p	L0p	L0p,(H1?)
緑	L0p	L0p	L0p	L0p	L0p,(H1p)
三原	L0p	L0p,(H1?)	L0p,(L2?)	L0p	L0p,(H1s)
西淡	L0p	L0p,(L2?)	L0p	L0p	L0p
南淡	L0p	L0p	L0p	L0p	L0p
[福良]	L0p	L0p	L0p	L0	L0p
[沼島]	H0,H1,L0	L0p	L0	L0	L0p
(京阪)	1, 0, <周>L2s	L0	L2, <周>L0p	L0, <周>L2s	L0, 1s, <周>1s

表 14 L0/L2 の南北分布を示す語群 (3)

地点名	粒(つぶ)	土手(どて)	眉(まゆ)	蕨(まゆ) ³²	宿(やど)
岩屋	L2p	H0,H1,L2	L2p	H0p,(L0?,L2?)	L2p,(L0)
東浦	L0p,(L2)	H1p	L2p,(H0,H1)	H0p,(L2p)	L0p,(L2p)
北淡	L2p,(L0s)	L2p,(H1)	L2p,(L0)	H0p,(H1,L2)	L2p,(L0s)
津名	L0p,(L2p)	H1p,L2p	L2p,(H0?)	H0p,L2p	L2p,(L0p)
一宮	L0p,(L2p)	L2p,(H1)	L2p	H0p,L2p	L2p,(L0p)
洲本	L0p	L2p,(H1)	L2p,(L0)	L2p,(H0)	L0p,(L2p)
[由良]	L0p	L2	L2	L2	H1,L2
五色	L0p	H1,L2	L2p	L2p,(H0,L0)	L0p
緑	L0p	H1,L2	L0p	L0,L2	L0p
三原	L0p	L2p,(L0)	L0p,L2p	L0p,L2p,(H0p)	L0p,(L2?)
西淡	L0p,(L2?)	L2p,(H1p)	L2p,(L0p)	L2p,(L0)	L0p,(L2p)
南淡	L0p	L0p,(H1)	L0p,(L2)	L0p,L2p	L0p
[福良]	L0p	L0	L0,L2	L0,L2	L0p
[沼島]	L0p	H1	L0	L0,L2	L2p,(L0)
(京阪)	L0	0, <周>L2p, 1p	L0, L2s, <周>1p	L0, L2s, 0s	L0, <周>L2p

表 15 L0/L2 の南北分布を示す語群 (4)

地点名	暑(あつさ)	傘(すもも)	広(ひろ)さ	双子(ふたご)	全体の傾向
岩屋	L0p,(L2)	L0p,(L2)	L2p,(L0)	L0p	L2
東浦	L0p,(L2)	L0p,L2p	L2p,(H2,L0)	L0p	L0,L2
北淡	L0p,L2p	L2p,(L0?)	L2p,(L0?)	L0p,L2p,(L3?)	L2
津名	L0,L2	L2p,(L0?)	L2p	L0p,(L2?)	L0,L2
一宮	L0,L2	L2p,(L0)	L0p,L2p,(H2)	L0p	L0,L2
洲本	L0	L0p,(L2)	L2p	L0p	L0,(L2)
[由良]	L0	L0	L2	L0	L0
五色	L0p	L0p,L2p	L0p,L2p	L0p	L0
緑	L0	L0p	L0p,(L2)	L0p	L0
三原	L0p	L0p,(H1)	L0p,L2p	L0p	L0
西淡	L0p	L0p	L2p,(L0p,H1?)	L0p	L0
南淡	L0p,(L2)	L0p	L2p,(L0?)	L0p	L0
[福良]	L0	L0	L0p	L0	L0
[沼島]	L0,L2	L0	L2p,(L0)	L0p	L0
(京阪)	L0, L2 若	L0, <周>L2p	L0, L2 若	L0	——

³² 「蕨」は(H0/L0)の南北分布とも見なせる(表20に再掲)。

L0, L2 以外の型が目立つために対応が見えづらい語もあるが、全体として北部で L2, 中・南部で L0 という傾向が見られる。(1b)の「管」も、L2 は北部に多い (図 6 参照)。

この対応で問題となるのは、山岡 (2012, 2014a) などで指摘される若年層を中心とした 2 拍名詞の L0→L2 というアクセント変化との関係だが、(2)に全島で L0 の語が豊富に挙げられるように、高年層 (60 代以上) ではこの変化は基本的に生じていない (山岡 2014a: 28)。多くの語では中央式の他の地域でも、L2 を中心に有核型が見られ³³、また L0 を中心に無核型も見られることから、(北部 L2//中・南部 L0)を L0→L2 と積極的に関連させる必要はないと思われる。

南北分布は、L0/L2 以外にも H1/L2(L2/H1)がある程度まとまった語数で見られる。

表 16 H1/L2 の南北分布を示す語群 (1)³⁴

地点名	嘘(うそ)	餓鬼(がき)	苔(こけ)	鱈(たら)	角(つの)
岩屋	H1p,L2p	L2p	L2p(H0,H1)	L2p	L2p
東浦	H1p(L2p)	L2p	H1p(L2)	L2p	L2p(H0,H1)
北淡	H1p(L2p)	L2p(H1?)	L2p(H1s)	L2p(H1?)	H1p(L2s)
津名	L2p(H1s)	L2p(H1s)	H1p(L2?)	L2p(H1p)	H1p(L2?)
一宮	H1p	L2p(H1?)	H1p	H1p(L2)	H1p
洲本	H1p(L2p)	H1,L2	H1p	H1p(L2)	H1p
[由良]	H1p	H1p	H1p	H1	H1p
五色	H1p(L2p)	H1p(L2)	H1p	L2p(H1)	H1p
緑	H1p	H1p(L2)	H1p	H1p(H0)	H1p
三原	H1p	H1p	H1p	H1p	H1p
西淡	H1p(L2?)	H1p(L2?)	H1p	H1p	H1p
南淡	H1p	H1p	H1p	H1p	H1p
[福良]	H1p	H1	H1p	H1	H1p
[沼島]	H1p	H1	H1p	L2	H1p
(京阪)	1, L2 若	1	1	L2	1, <周>L2s

表 17 H1/L2 の南北分布を示す語群 (2)

地点名	猫(ねこ)	蝮(ハメ) ³⁵	へま	孫(まご)	路地(ろじ)
岩屋	L2p	L2p	L2p(H1)	H1p	L2p(H1)
東浦	H1p,L2p	L2p	L2p	L2p(H1p)	H1p,L2p
北淡	L2p(H1?)	L2p	H1p,L2p	L2p(H0?)	L2p(H1p)
津名	H1p(L2?)	L2p(H1?)	H1p(L2p)	H1p(L2?)	L2p(H1p)
一宮	H1p(L2)	L2p	L2p(H1)	H1p	L2p(H1)
洲本	H1p	H1p(L2)	H1p	H1p	H1p(L2p)
[由良]	H1p	H1p	H1	H1p	H1
五色	H1p	L2p	H1p,L2p	H1p	H1p(L2)
緑	H1p	H1p	H1,L2	H1p	H1p
三原	H1p	H1p	H1p(L2)	H1p	H1p(L2p)
西淡	H1p	H1p	H1p	H1p	H1p,L2p
南淡	H1p	H1p(L2?)	H1p	H1p	H1p
[福良]	H1p	H1	H1	H1p	H1
[沼島]	H1p	H1	L2	H1p	H1
(京阪)	1, <周>L2p	——	L2, 1 若	1	1「露地」

³³ L0 のみが挙げられている「穴、屑、粒」のうち、「穴、粒」は小野市 L2。「玉」も小野市 L2 で、高知市のみ H1 (他の周辺部は L0)。「屑」は同音の「葛」か「愚図」(ぐず)L2(H1)のアクセント (あるいは意味) が影響したのか。北部の L2 は兵庫県南部の L2 と地理的に連続する可能性がある。

³⁴ 「餓鬼」、「苔」、明石市では H1 との併用で L2 も。

³⁵ 「蝮(ハメ)」, 明石市 L2, すさみ町江住ハビ H1。

表 18 H1/L2 の南北分布を示す語群 (3)

地点名	罌(わな)	瓦(かわら)	胡瓜(きゅうり)	毛虫(けむし)	螢(ほたる)
岩屋	L0p	H1p,(L2)	L2p,(H1)	L2p	H1p,(L2)
東浦	L2p,(H1,L0)	H1p	H1p,(L2p)	L2p	H1p,L2p
北淡	L0p,(L2?)	L2p,L3p,(H1p)	L2p,(H1p)	L2p,(H2s,L3s)	L2p,(H2p,H1s)
津名	L0p,(H1s)	H1p	H1p,(L2)	L2p,(H2?)	H1p,(L2)
一宮	L2p,(H1,L0)	H1	H1p	L2p,(H1)	H1p
洲本	L0p,(H1?)	H1p	H1p	L2p,(H1)	H1p
[由良]	L0	H1	H1p	H1,H2,L2	ホータル H2
五色	H1p,L0p	H1p	H1p	H1p,L2p	H1p
緑	L0p,(H1)	H1p カーラ	H1p	H1p	H1p
三原	H1p,(L0p)	H1p	H1p	H1p,(L2?)	H1p
西淡	H1p,(L0p)	H1p	H1p	H1p,(L2)	H1p
南淡	H1p,(L0)	H1p	H1p	H1p,(L2)	H1p
[福良]	H1p,(L0)	H1	H1p	H1p,(L2)	H1
[沼島]	L0p	H1 カーラ	H1p	H1,L2	H1
(京阪)	L0	1, <周>2s	1	L2, <周>0, 1s	1, <周>L2p

表 19 H1/L2 の南北分布を示す語群 (4)

地点名	枕(まくら)	若布(わかめ)	蕨(わらび) ³⁶	全体の傾向
岩屋	L2p,(H1)	L2p	L2p,(H1)	L2
東浦	L2p,(H1,H2)	H1p,L2p	L2p,(H1?)	L2
北淡	L2p,(L3s)	L2p,(H1?)	L2p,(H1p,L3p)	L2
津名	H1p,(L2)	H1p,(L2p)	H1p,L2p	H1,L2
一宮	H1p,(L2?)	H1p,(L2)	H1p,L2p	H1,(L2)
洲本	H1p	H1p	H1p	H1,(L2)
[由良]	H1	H1	H1p	H1
五色	H1p	H1p	H1p	H1
緑	H1p	H1p	H1p	H1
三原	H1p	H1p	H1p	H1
西淡	H1p	H1p	H1p	H1
南淡	H1p	H1p,(L2)	H1p,(L2)	H1
[福良]	H1	H1	H1	H1
[沼島]	H1p	H1p	H1p	H1
(京阪)	1	1	1, <周>2s, L2s	—

北部でL2, 中・南部でH1という傾向が認められる(中部にもややL2が見られる)。北淡を中心に分布が見られる点は(L2/L0)と共通する。

(H2{H1}H2)の周圏分布におけるH1も、岩屋以外の北部の特に北淡でよく見られる。両者を較べると、(南H2 || 北H1), (南H1 || 北L2)という対応があることになり、この2つの対応はH2→H1→L2のように連動している可能性がある³⁷。一方で、H2 || H1は程度の差はあるがかなり規則的に見られるのと較べると、H1 || L2はL0 || L2と同様に語彙的である(そのため(2)に全島でH1の語が挙げられる)。むしろ何故(L2/H1)と(L2/L0)の分布が類似するかが問題となろう。

³⁶ 「蕨」、明石市L2, 高知市, すさみ町江住H2(徳島市, 小野市, 旧祇王村, 旧中川村H1)。

³⁷ 中央式の中央部ではH2→H1の変化が生じた(中井2002:17)。淡路方言におけるH2 || H1の対応は、北部でH2→H1が進行しつつあることを示している。山岡(2012)は若年層も含めた調査で、岩屋, 富島, 郡家【一宮】でHHL(H2)の語にHLL(H1)が聞かれるとする(p.52-53)。山岡(2012)では郡家以外の高年層はH2で安定しているようだが、本稿の結果は70歳以上ですすでに北部で変化が生じていることを示している。岩屋は老年層ではH2→H1が生じておらず、一宮は変化がやや遅れている。富島は北淡一帯に見られる「下降の遅れ」(H1が[HHL(...)]で発音される傾向)という別の要因が関わっている可能性もある(本稿では[HHL(...)]をH2とする)。

表 20 その他の南北分布を示す語群 (1)

地点名	燕(ツバクロ)	肩車(カタクマ,カタグマ)	艶(つや) ³⁸	繭(まゆ)
岩屋	L3p(L2)	L3(,ドンデンマカ(セ)L5p)	H0p	H0p(L0?,L2?)
東浦	L3p	L3p	H0p	H0p(L2p)
北淡	L3p,L4p	L3,L4	H0p(L0?,L2?)	H0p(H1,L2)
津名	L3p	L3p	H0p(L0s)	H0p,L2p
一宮	L3p	L3p	H0p(L0)	H0p,L2p
洲本	L3p	L0,L3	L0p(H0)	L2p(H0)
[由良]	L2	(チヨーサ H1p)	L0p	L2
五色	L2p,L3p	L2p(L3)	L0p	L2p(H0,L0)
緑	L2p	L2p	L0p	L0,L2
三原	L2p	L2p	L0p	L0p,L2p(H0p)
西淡	L2p	L2p(L3,カタンマ L2p)	L0p(H0)	L2p(L0)
南淡	L2p	L2p(L3)	L0p	L0p,L2p
[福良]	L3	(カタグルマ L3p)	L0	L0,L2
[沼島]	L2	L0p	L0	L0,L2
(京阪)	—	—	0	L0, L2s, 0s

表 21 その他の南北分布を示す語群 (2)

地点名	小屋(こや) ³⁹	沙汰(さた)	三日月(みかづき)
岩屋	H0p	H0p	H0p
東浦	H0p	H0p(H1)	H0p
北淡	H0p	H0p,H1p	H0p
津名	H0p	H0p,H1p	H0p
一宮	H0p	H0p,H1p	H0p
洲本	H1p(H0p)	H0p(H1)	H0p
[由良]	H1p	H0	H0p
五色	H1p(H0)	H0p(L0)	H0p(H3?)
緑	H1p	H1p	H0p
三原	H1p	H1p(H0p)	H0p(H3?)
西淡	H1p	H1p(H0?)	H0p(H3)
南淡	H1p	H1p	H0p
[福良]	H1	H0	H3p
[沼島]	H1p	H1	H3p
(京阪)	0	1, 0 若	0, <周>3p

表 22 その他の南北分布を示す語群 (3)

地点名	仇(あだ)	小麦(こむぎ)	仲人(なこうど)	朝飯(あさめし)
岩屋	H1p	H2p(H1?)	H2p	H3p
東浦	H0p(H1,L2)	H2p(H1?)	H2p	H0p(H3)
北淡	H1p	H1p(H2?,L2?)	H2p(L2?)	H0p,H3p
津名	H0p(H1p)	H1p(H2p)	H2p(L2p)	H0p
一宮	H0p	H1p,H2p(L2)	H2p(H1,L2)	H0p
洲本	H0p(H1)	H0p,H2p	H0p(H2,L2)	H0p(L0)
[由良]	H0	H2	H0	H0
五色	H0p	H2p(H0)	H0	H0p
緑	H0,H1	H2p(H0?)	H0,H2	H0p
三原	H0p(H1)	H0p,H2p	H0p(H2p)	H0p
西淡	H0p(H1p)	H0p(H2)	H0p(L2)	H0p(H3,L0)
南淡	H0p(H1)	H0p(H2)	H2p(H0)	H0p
[福良]	H1	H0,H1,H2	H0p	H0p
[沼島]	H0	H2p	H0p(L2)	L3p
(京阪)	0, 1	1, L2s, <周>2p	2, L2, 3, 0s<周>2, 0	3, L3s, 0s, L0 若, <周>1p

³⁸ 「艶」, 高知市, 徳島市 H1. 淡路島南部に分布する L0 と何か関係があるか。

³⁹ 「小屋」, 高知市, 徳島市 H1. 淡路島南部の H1 は四国と連続している可能性がある。

表 23 その他の南北分布を示す語群 (4)

地点名	噂(うわさ)	薪(たきぎ)	穴子(あなご)
岩屋	L2p,(H1)	H0p,(L0)	L2p
東浦	H1,H2,L2	L0p,(H0)	H1p,L2p
北淡	L2p,(H1,H2,L0)	H0p,L0p	H1p,(H0p,L2p)
津名	H2	L0	H1p,(H0,L0,L2)
一宮	H1	ND	H0p,(H1)
洲本	L2	H0	L0p,(H0)
[由良]	H2	H0p	L2p
五色	L2,(H1,H2)	H0p	H0p,(H1)
緑	H2,L2	H0	H0,L0
三原	L2p,(H0)	H0p	H0p
西淡	L2p	H0p	H0p,(H1,H2)
南淡	L2p	H0p	H0p,(L2)
[福良]	L2	H0	H0
[沼島]	L2	H0	H1
(京阪)	1, 0 若, <周>2s	0, <周>L0p	——

その他の南北分布を示す語を表 20-23 に挙げた。

表 20 は L2/L3 と H0/L0 の対応だが、周圏分布(L3{L2}L3)と異なり北部で L3 が現れる(L3//L2)。H0/L0 は周圏分布にも見られるが、沼島も L0 であるのが異なる。表 21 は H 式で北部無核、南部有核の分布を示すが、範囲に違いがある。表 21 は逆に H 式で北部有核、南部無核の傾向がある語を挙げたが、「仇」はそれほど明瞭ではない。図 2 の「葎」も含め、少なくとも 2 拍語では H0/H1 の南北分布には(H0//H1)のみ認めた方が良いかもしれない。「小麦」は(H2{H1}H2)の周圏分布と同時に、中・南部でのみ H0 が現れる南北分布(H1//H0)の対応も示す。「仲人」は中・南部で無核型が見られる(H2//H0)。

周圏分布とも南北分布とも言えないものとして、一部地域にのみ異なる型が現れる語もある。

表 24 一部の地域で特殊な型が見られる語群

地点名	痣(あざ)	海栗(うに)	音(おと)	蝸(さなぎ)	額(ひたい)
岩屋	H1p	H1p	H1p	L2p,(L0)	L0p
東浦	H1p,(H0)	H1p	H1p	L0p	H0p
北淡	H0p,H1p	H1p	H1p,(H0s)	L2p	H0p,(L0s)
津名	H1p	H1p,(H0,L2)	H1p	L2p,(H0,H2,L0)	L0p,(H0s)
一宮	H1p	H1p,(L2)	H1p	L2p	L0p,(H0)
洲本	H1p	H1p	H1p	L2p	L0p
[由良]	H1p	H1p	H1	L0	H0,L0
五色	H1p	H1p	H0p,(H1)	L2p	L0p
緑	H1p	H1p,(L2)	H1p	L2p	L0p
三原	H1p	H1p	H1p	L2p,(L0s)	L0p
西淡	H1p	H1p,(L0)	H1p	L2p,(L0?)	L0p
南淡	H1p	H1p,(H0)	H1p	L2p	L0p
[福良]	H1p	H1	H1p	L2	L0p
[沼島]	H1p	H0p	H1p	L0p	H0p,(L0)
(京阪)	1	1	1	L0, <周>L2p	0, 1s, L0s, <周>2s

個別的ながら安定して現れるため、その地域を特徴づける語彙候補と言える。北淡・津名にのみ L2 が現れる「双子」(表 15 参照) もこちらに入れた方が良いかもしれない。

2.3 その他のアクセントの地域差

アクセントの地域差は名詞以外にも見られる。ここでは形容詞の活用形の一部（仮定形「～けりゃ」、過去形「～かった」）と複合名詞のアクセントの地域差について見ていく。

表 25 その他のアクセントの地域差

地点名	形容詞活用形		後部3拍複合名詞		
	仮定形(～けりゃ)	過去形(～かった)	-2型 ^{***}	-3型 ^{***}	話者数
岩屋	-2(=H-2, L-2)	-4(=H-4, L-4)	32 (25.2%)	75 (59.1%)	男2人, 女1人
東浦	-2	-4, -3	7 (4.1%)	142 (84.0%)	男1人, 女3人
北淡	-2	-3	29 (8.1%)	283 (78.9%)	男8人, 女2人
津名	-2	-3	4 (1.2%)	306 (88.4%)	男4人, 女5人
一宮	-2	-3	6 (3.3%)	154 (84.6%)	男2人, 女3人
洲本	-3(-2)	-4(-3)	25 (17.5%)	115 (80.4%)	男4人
[由良]	-3	-4	20 (30.8%)	38 (58.5%)	男2人
五色	-2	-4(-3)	23.5 (15.1%)	111.5 (71.5%)	男2人, 女2人
緑	-3	-4	22 (18.5%)	90 (75.6%)	男1人, 女2人
三原	-3	-4	106.5 (33.9%)	182.5 (58.1%)	男6人, 女2人
西淡	-3	-4	73.5 (32.0%)	135.5 (58.9%)	男4人, 女2人
南淡	-3	-4	52 (46.0%)	49 (43.4%)	男3人
[福良]	-3	-4	19 (27.5%)	44 (63.8%)	男1人, 女2人
[沼島]	-3*	-4	18 (24.7%)	45 (61.7%)	男1人, 女1人

*「無けりゃ」、^レ「良けりゃ」のみ L2(=L-2)と-2になる場合あり。***併用の場合は0.5ずつで振り分けた。

淡路方言の形容詞の活用形のアクセントのうち、過去形「～かった」については山岡 (2014b) ですでに同様の調査と結果が示されている。高年層 (60代～70代, 一部80代前半) に限定すると、岩屋-4, 富島【北淡】-3, 郡家【一宮】-3, 洲本-4, 由良-4, 津井【西淡】-4, 福良-4 (p.42) である (表 25 で洲本が-4(-3)なのは、津名に接する地点 (安乎) で-3が出るため)。本稿では淡路全島での調査を行い詳しい分布を示した。また、山岡 (2014b) にない仮定形「～けりゃ」を併せて挙げた。岩屋や五色で-2が優勢なのが過去形と異なる。

後部3拍複合名詞は中澤 (2013) でも扱ったが、話者数を増やし、(6)の語に限定するなどなるべく条件を揃えた結果を示した(ただし全話者で全項目のデータが揃っていないわけではない)。

- (6) 赤蜻蛉(あかとんぼ), 石頭(いしあたま), 腕相撲(うでずもう), 裏表(うらおもて), 裏通り(うらどおり), 依怙最頂(えこひいき), 大雑把(おおざっぱ), 大通り(おおどおり), 大晦日(おおみそか), 置き薬(おきぐすり), 親代わり(おやがわり), かき氷(かきごおり), 風車(かざぐるま), 肩車(かたぐるま), 紙一重(かみひとえ), 紙袋(かみぶくろ), 草筆り(くさむしり), 口喧嘩(くちげんか), 栗拾い(くりひろい), 声変わり(こえがわり), 霜柱(しもばしら), 脛齧り(すねかじり), 滝登り(たきのぼり), 出来心(できごころ), 共倒れ(ともだおれ), 夏休み(なつやすみ), 生卵(なまたまご), 喉仏(のどぼとけ), 飲み薬(のみぐすり), 野良仕事(のらしごと), 禿頭(はげあたま), 初日の出(はつひので), 春休み(はるやすみ), 暇潰し(ひまつぶし), 冷や奴(ひややつこ), 昼休み(ひるやすみ), 盆休み(ぼんやすみ), 水遊び(みずあそび), 物語(ものがたり), 物忘れ(ものわすれ), 八つ当たり(やつあたり), 茹卵(ゆでたまご), 藁草履(わらぞうり)

中澤(2013)と結果が大きく異なるのは岩屋である(以前の結果は-2型2.3%、-3型86.4%)。中澤(2013)では岩屋は女性話者1名のデータに基づいていたが、男性話者2名のデータを追加したのが今回の結果である。南北を問わず、男性より女性の方が-3型の比率が高い傾向にある上、以前のデータは北部が女性、南部が男性に偏っていたため、結果が極端になっていた。北部で男性話者、南部で女性話者を中心に調査を拡充した結果、南北の差は以前よりも小さくなったが、北部で-2型がほとんど現れないという結果に変わりはない。男女ともに、北部から南部に行くほど-2型の比率が高くなる傾向にある(ただし、沼島で女性話者は-2型が0)。

表 26 後部3拍複合名詞のアクセントの男女差

地点名	男性		女性		総データ数	
	-2型	-3型	-2型	-3型	男性	女性
岩屋	32 (38.1%)	36 (42.9%)	0 (0.0%)	39 (90.7%)	84	43
東浦	6 (14.0%)	32 (74.4%)	1 (0.8%)	110 (87.3%)	43	126
北淡	27 (10.0%)	212 (78.2%)	2 (2.4%)	71 (83.5%)	271	85
津名	3 (1.8%)	150 (89.3%)	1 (0.6%)	156 (87.6%)	168	178
一宮	3 (4.1%)	59 (80.8%)	3 (2.8%)	95 (87.2%)	73	109
洲本	25 (17.5%)	115 (80.4%)	(0) —	(0) —	143	0
[由良]	20 (30.8%)	38 (58.5%)	(0) —	(0) —	65	0
五色	10 (13.9%)	52 (72.2%)	13.5 (16.1%)	59.5 (70.8%)	72	84
緑	3 (8.8%)	30 (88.2%)	19 (22.4%)	60 (70.6%)	34	85
三原	94 (38.2%)	129 (52.4%)	12.5 (18.4%)	53.5 (78.7%)	246	68
西淡	58.5 (38.0%)	84.5 (54.9%)	15 (19.7%)	51.5 (67.1%)	154	76
南淡	52 (46.0%)	49 (43.4%)	(0) —	(0) —	113	0
[福良]	11 (31.4%)	20 (57.1%)	8 (23.5%)	24 (70.6%)	35	34
[沼島]	18 (46.2%)	13 (33.3%)	0 (0.0%)	32 (94.1%)	39	34

データ不足から洲本は位置付けがはっきりしないものの、岩屋と由良は男性の-2型の比率が南部に近いこと、五色の女性も南部の女性と同程度に-2型が見られることから、-3型への偏りは(岩屋以外の)北部で顕著であると言える。

なお、中澤(2011a, 2012)で地域差として挙げた動詞の有核型の出現の違い(北部:無核優勢、南部:有核)は確かにあるものの、北部でも有核型が現れる一方で南部でも無核型が見られるため、頻度の違いなどから捉え直す必要があるようである。また、動詞の有核型でも男女差が恐らく関わっている(女性の方が無核になる傾向がある)。関連して、地域差ではないが、動詞のアクセントに関して重要と思われる結果の一部を挙げる。

(7) 無核が予想されるが有核型が見られる動詞

H1: 探(さぐる)、論(さと)す、進(すす)む、注(そそ)ぐ、曲(ま)がる(「邪魔になる」でも)、磨(みが)く、…

(8) 有核が予想されるが無核型しか見られない動詞

H0: 叫ぶ(さけ)ぶ、守(まも)る、恐(おそ)れる、眺(なが)める、…

有核の出現を判断する際にこれらの語をどう位置付けるかは今後の課題である。

3. 語彙の地域差

2.2 で見てきた地域差は一部の語彙の方言形にも認められる⁴⁰。周囲分布型から挙げる。

表 27 方言形が周囲分布を示す語群 (1)

地点名	百足(むかで)	大きい	秤(はかり)
岩屋	ムカゼ, ムカデ p)	オツケイ p	チンギ p(, チギ?)
東浦	ムカジ p	オツキヨイ p	チギ p(, チンギ)
北淡	ムカジ p, ムカゼ p	オツケイ p(, オツキヨイ p)	チギ p(, チンギ p)
津名	ムカゼ p(, ムカジ s)	オツキヨイ p(, オツケイ?)	チギ p
一宮	ムカジ p, ムカゼ p	オツキヨイ p	チギ p(, チンギ)
洲本	ムカゼ p(, ムカジ)	オツキヨイ p	チギ p(, チンギ p)
[由良]	ムカゼ p	オツキヨイ, オツケー	チギ p
五色	ムカジ p(, ムカゼ)	オツキヨイ p	チギ p(, チンギ)
緑	ムカジ p	オツキヨイ p	チンギ p(, チギ?)
三原	ムカジ p(, ムカゼ?)	オツキヨイ p	チンギ p(, チギ p)
西淡	ムカジ p	オツキヨイ p	チンギ p(, *チーギ)
南淡	ムカジ p(, ムカゼ?)	オツキヨイ p	チンギ p
[福良]	ムカゼ	オツキヨイ	チンギ
[沼島]	ムカジ p, ムカゼ p	オツキヨイ, オツケイ	チンギ

表 28 方言形が周囲分布を示す語群 (2)

地点名	蓬	醤油	仲人(なこうど)
岩屋	ヨムギ p	シヨ一ユ一 p	ナカド p, ナコド p
東浦	ヨムギ p	シヨユ p	ナコド p
北淡	*ヨゴミ p(, ヨムギ p, ユムギ p)	シヨイ	ナコド p
津名	ユムギ, ヨムギ	シヨイ p(, シヨユ一)	ナコド p
一宮	ユムギ p(, イムギ?)	シヨイ, シヨユ	ナコド p
洲本	ユムギ p(, ヨムギ)	シヨユ p(, シヨイ?)	ナコド p
[由良]	ヨムギ p	シヨユ	ナカド p(, ナコド)
五色	ユムギ p	シヨイ p	ナコド p(, ナコンド?)
緑	ユムギ p(, ヨムギ)	シヨユ	ナコド p
三原	ユムギ p(, ヨムギ p)	シヨユ p	ナコド p
西淡	ユムギ p(, ヨムギ)	シヨユ p	ナカド p(, ナコド)
南淡	ヨムギ p	シヨユ	ナコド p(, ナカド)
[福良]	ヨムギ	シヨユ	ナカド p
[沼島]	ヨムギ p	シヨ一ユ一	ナカド p

表 29 方言形が周囲分布を示す語群 (3)

地点名	抓る(つねる[ツメル, ツメキル])	捻る(ひねる)《大きく抓る》
岩屋	チミキル p	ヒニキル, ヒネキル, ヒネクル
東浦	チミキル, チメル, チメキル, ツメル, ツメキル	ヒネキル p(, ヒネル, ヒニキル)
北淡	チミキル p	ヒニキル p(, ヒネキル p)
津名	チミキル p	ヒニキル p(, ヒネル p, ヒネキル p)
一宮	チミキル p(, チミル?)	ヒニキル p(, ヒネキル)
洲本	チミキル p	ヒニキル p
[由良]	チミキル	ヒニキル
五色	チミキル p(, チメキル p)	ヒネキル p(, ヒニキル)
緑	チミキル p	ヒニキル p
三原	チミキル p(, ツメル?, ツメキル?)	ヒニキル p
西淡	チミキル p(, チミル?, チメキル?)	ヒニキル p(, ヒネキル?)
南淡	チミキル p(, チメキル)	ヒニキル p
[福良]	チミキル	ヒネキル
[沼島]	チミキル, チメキル	ヒネキル p

⁴⁰ 表の記号の用法はアクセントと同じ。* は一部の地域に見られる特徴的な語形。

表 30 方言形が周囲分布を示す語群 (4)

地点名	米櫃(こめびつ)	こむら返り
岩屋	ゲブツ p	コブラガエリ p
東浦	ゲブツ p	コブラガエリ p
北淡	ゲブツ p(,ゲビツ?)	コブラガエリ p
津名	ゲブツ p(,ゲビツ?)	コブラガエリ p
一宮	ゲブツ p	コブラガエリ p
洲本	トビツ p	コブラガエリ p
[由良]	トビツ	コブラガエリ p
五色	トビツ p	コクラガエリ p(,コブラガエリ p)
縁	トビツ p	コクラガエリ p(,コブラガエリ)
三原	トビツ p	コクラガエリ p(,コブラガエリ s,コップラガエリ?)
西淡	トビツ p	コクラガエリ p(,コクラガエシ,コクラガヤリ)
南淡	トビツ p	コブラガエリ p
[福良]	トビツ p	コブラガエリ p
[沼島]	ゲブツ p	コブラガエリ

「大きい」、「仲人」はそれぞれ [オッキョイ]、[ナコド] が広く分布しているが、周辺部に [オッケイ]、[ナカド] という共通した形が見られる。「秤」は [チンギ] が広く見られるが、北・中部では [チギ] が優勢である。「米櫃」は一見([ゲブツ] 系// [トビツ])の南北分布にも見えるが、沼島が [ゲブツ] で北部と共通する周囲分布である。「こむら返り」における [コクラガエリ] 系(表 30 のゴシック形)は三原辺りを中心に南西部の一部地域にのみ見られる。

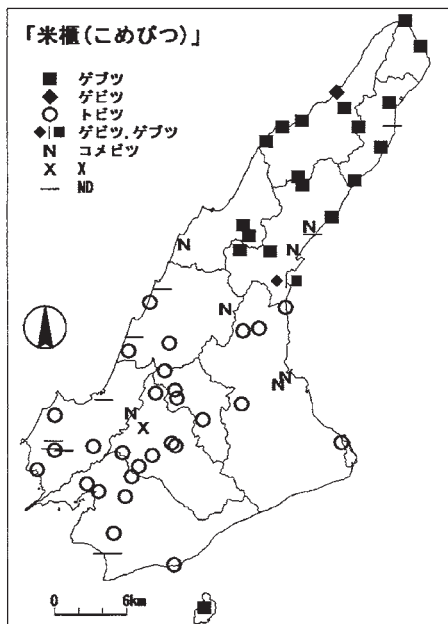


図 10 「米櫃」の語彙分布

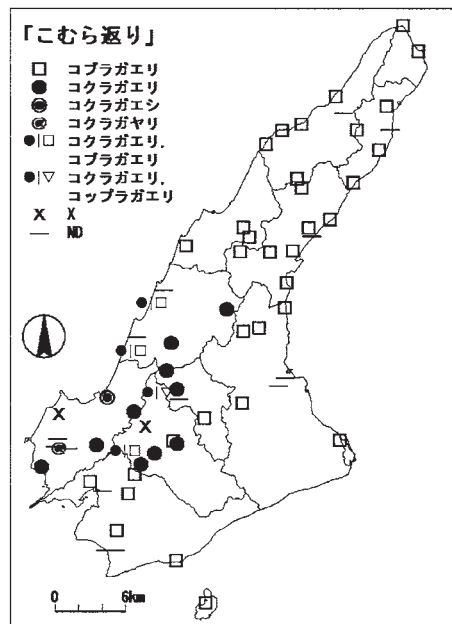


図 11 「こむら返り」の語彙分布

「蓬」の [ユムギ] 系も三原を中心とした西側に見られるが、北部の一部地域に食い込んだ分布を示す。「百足」の [ムカジ] も同様に北部まで広がり、[ムカゼ] が分断される形になっており、「仲人」や「大きい」に類似した分布となっている。

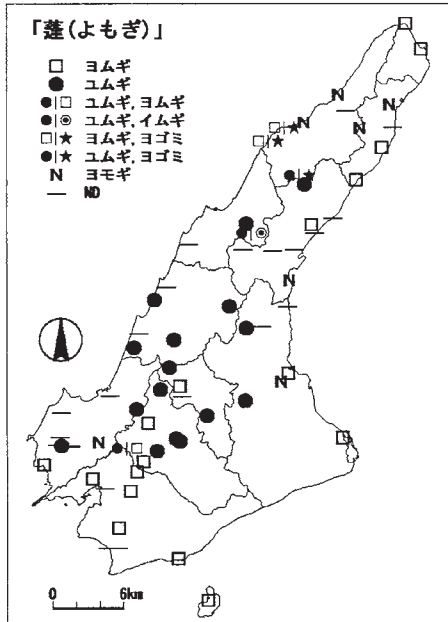


図 12 「蓬」の語彙分布

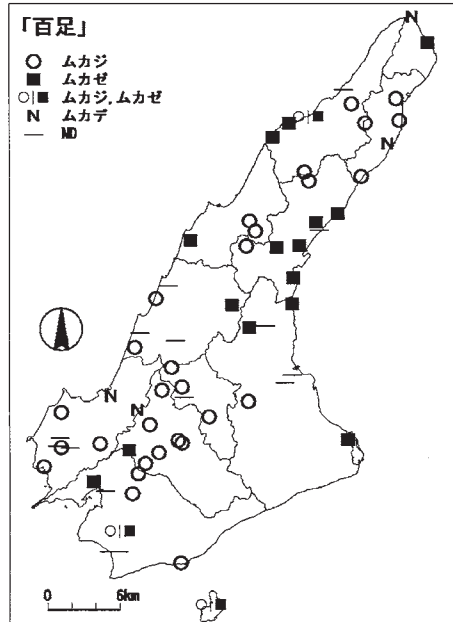


図 13 「百足」の語彙分布

方言形が南北分布を示す語彙には表 31-33 のようなものが挙げられる。

表 31 方言形が南北分布を示す語群 (1)

地点名	(雨が)漏る	(家を)壊(こわ)す	肥桶(こえおけ)	病気・疲れ
岩屋	ボルp(ムル?)	コボツp	タンゴp	ケンビキp
東浦	ボルp	コボツp	タンゴp	ケンビキp
北淡	ボルp(ブル?,ムル?)	コボツp	タンゴp(タゴ?)	ケンビキp(ケンベキs)
津名	ボルp	コボツp	タンゴp	ケンビキp
一宮	ボルp(ブル)	コボツp	タゴp(タンゴp)	ケンビキp
洲本	ブルp(ボル?)	コボツp(コボス)	タゴp,タンゴp	ケンビキp
[由良]	ボルp	コボスp	タンゴ	ケンビキp
五色	ブルp(ボル?)	コボツp	タゴp,タンゴp	ケンビキp
緑	ブルp	コボスp	タゴp	ケンビキ,ケンベキ
三原	ブルp(ボル?)	コボスp	タゴp(タンゴ?)	ケンビキp,ケンベキp
西淡	ブルp	コボスp	タゴp	ケンビキp(ケンベキ)
南淡	ブルp	コボスp	タゴp	ケンベキp(ケンビキ?)
[福良]	ブルp	コボス	タゴ	ケンビキ
[沼島]	ブルp	コボス	タゴ	ケンベキ

「(雨が)漏る」は([ボル] // [ブル])の南北分布だが、北部からやや離れた由良に [ボル] がある。「肥桶」の([タンゴ] // [タゴ])も「漏る」とほぼ同様の分布を示す。「肥桶」は周囲分布の「秤」([チンギ] { [チギ])と音節構造ではほぼ逆の傾向を示す。「(家を)壊す」は(北・中 [コボツ] // 南 [コボス])だが、洲本のうち南部に接する地域 (大野) と由良は [コボス] である。「病気・疲れ」では主に南部に [ケンベキ] が広がっている (北部にも若干見られる)。

表 32 方言形が南北分布を示す語群 (2)

地点名	棘(とげ)	目玉(めだま)	～だろう
岩屋	ソゲp	メンタマ	ジャロ p
東浦	ソゲp	メンタマp	ダレp
北淡	ソゲp	メンタマ,メンダマ	ダレp(,ダロp)
津名	ソゲp	メンタマp(,メコタマ?)	ダーp(,ダロp,ダレp)
一宮	ソゲp	メンタマp,メコタマp	ダロp(,ダー?,ダレ?)
洲本	ソゲp	メンタマp	ダーp(,ダロ?)
[由良]	ソゲp,クイp	メンダマ	ダー
五色	ソゲp	メコタマp	ダーp,ダロp
緑	ソゲp(,ソッピラ)	メコタマp(,メンタマ)	ダーp
三原	ソッピラp(,ソグs)	メンタマp,メコタマp	ダーp(,ダレ?)
西淡	ソッピラp(,ソグp,クイp)	メコタマp	ダーp
南淡	ソッピラp(,ソグ)	メコタマp	ダーp(,ダオ?)
[福良]	ソッピラp(,ソグ,クイ)	メコタマ	ダー
[沼島]	ソゲp(,ソッピレ,クイ)	メコタマ	ダー

「棘」は「ソゲ」が広く分布するが、南部に「ソッピラ」系が見られる。「目玉」の「メコタマ」も南部を中心に見られ、西側では北部の一宮辺りまで広がっている⁴¹。淡路方言に特徴的な「～だろう」の「ダー」は中・南部に分布し、北部の津名にも見られる。

表 33 方言形が南北分布を示す語群 (3)

地点名	枯れ松葉	虎杖	めだか《小魚》
岩屋	コクバp	イタンボp	ミトチンp
東浦	コクバp	イタズリp,イタンボp	ミトチンp(,ミトビチ)
北淡	コクバp(,コックワs)	イタズリp,イタンボp,ユタンボp	ミトチンp(,メトチンp)
津名	コクバp(,シバ?)	イタズリp	ミトチンp(,メトチン)
一宮	コクバp(,シバp)	イタズリp	ミトチンp
洲本	コクバp(,コバ?,クズ?)	イタズリp	ミトジャコ,ミミジャコ,メメジャコ
[由良]	*スクザp	*ノッポリp	メダカp
五色	スクズp(,コクバ)	イタズリp	ミンジャコp(,ミミジャコ)
緑	スクズp(,コック,コクズ,ソクズ)	イタズリp	ミミジャコp(,*ハイヤコ)
三原	コクズp,スクズp,ソクズp	イタズリp	ミミジャコp(,ミンジャコ,メメジャコ)
西淡	スクズp,ソクズp(,コクバp)	イタズリp(*,ネッコ)	メメジャコ,*ニブサン
南淡	スクズp(,コクズp)	イタズリp(,イタンボ,*イタッポ)	メメジャコp
[福良]	コクバp	イタズリ	ミミジャコ
[沼島]	コクズp	イタズリp	メダカp

「枯れ松葉」は南部に「スクズ」系と「コクズ」が分布し、北部と福良に「コクバ」系が見られる。由良には「スクズ」系だが特徴的な語形「スクザ」が見られる。「虎杖」は「イタズリ」が広く分布する中、北淡を中心に北部の一部に「イタンボ」系が見られるため南北分布に含めたが、南淡の一部にも「イタンボ」系が分布する。さらに、由良に「ノッポリ」、西淡(阿那賀)に「ネッコ」という特徴的な語形が見られる。「めだか」(「小魚」全般も)は北部に「ミトチン」系、中・南部に「ミミジャコ」系が分布し、津名と接する洲本北部の安乎あいはらには混成形「ミトジャコ」が見られる。「ニブサン」は阿那賀【西淡】の形である⁴²。

⁴¹ 岩本孝之(2013)では「メコタマ」(、「メコッタマ」,「メコター」)を見出しにあげ、「メンタマ」(五色・三原)と、本稿のデータと逆に近い結果になっている。

⁴² 岩本(2013)は筆者の資料と少々異なり、「ミトチン」(北部,津名,一宮,安乎【洲本】),「メンジャコ,メメジャコ,メメンジャコ」(五色),「ミトジャコ」(浦【東浦】),「ミンジャコ」(佐野【津名】),山田【一宮】,

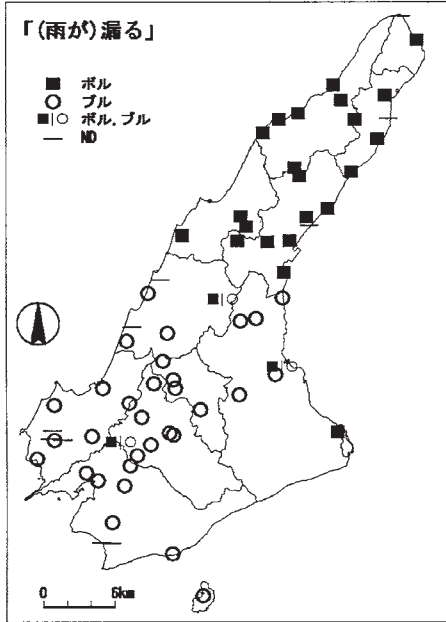


図 14 「雨が漏る」の語彙分布

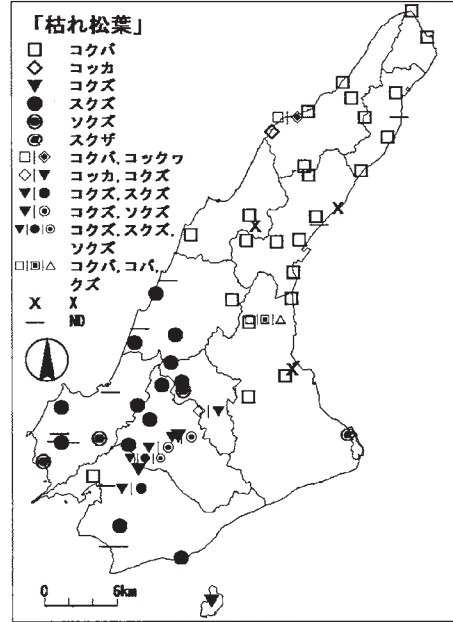


図 15 「枯れ松葉」の語彙分布

語形が多様だが、南北分布に準ずるものとして「膝頭」の方言形が挙げられる。

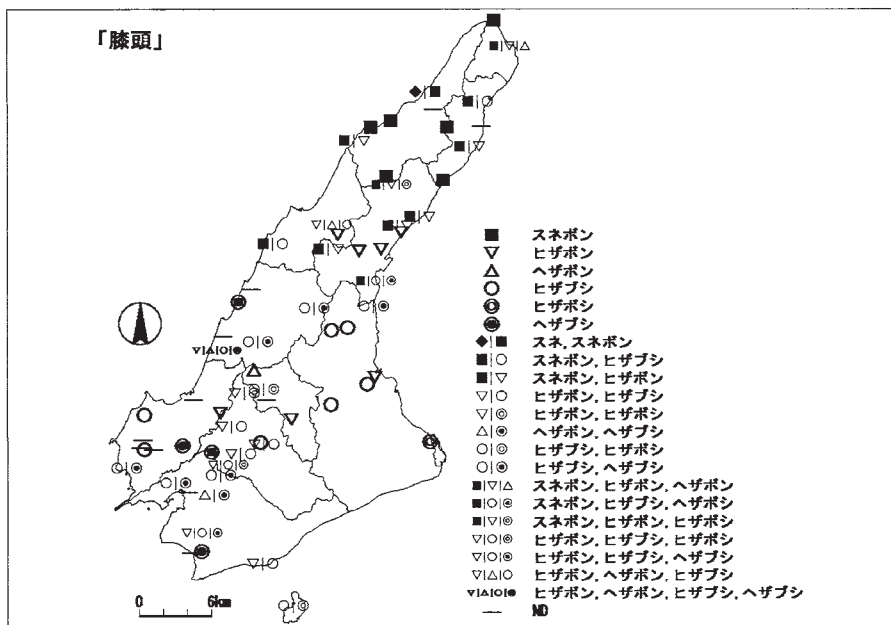


図 16 「膝頭」の語彙分布

堺【五色】、【ミミジャコ】(山田, 広石【緑】、旧三原郡【≒南部】)、【ミミンジャコ】(鮎原【五色】、沼島)、
 【メメタ】(洲本)、【メメタコ】(南あわじ市中條【緑】)、【メメチャン、マンタコ】(上灘【洲本】)、【ハゼピン】
 (志筑【津名】)となっている(ゴシックと斜体は筆者)。

[ヒザボン]系がほぼ全島に見られ、北部に[スネボン]系、南部に[ヒザブシ]系が分布する(北部にも若干[ヒザブシ]系が見られる)。

地域差が明瞭でない方言語彙も多い。そのうちのいくつかを取り上げる。

表 34 地域差の不明瞭な語群 (1)

地点名	歯茎	にわか雨	担桶
岩屋	ハゴケ	ソーバエ p	ニナイ p
東浦	ハゴキ p	ソーバイ p	ニナイ, ニーナ
北淡	ハゴキ p	ソーバイ p	ニナイ p, (ニナイ)
津名	ハゴキ p	ソーバイ p, (ソーバエ?)	ニナイ p, (ニナイ)
一宮	ハゴキ p	ソーバイ p	ニナイ p
洲本	ハゴキ	ソーバイ p	ニナイ p
[由良]	ハゴキ p, (ハゴケ)	ソーバエ p	ニナイ
五色	ハゴケ	ソーバイ p, ソーバエ p	ニナイ, ニーナ
緑	ハゴケ	ソーバエ p, (ソバエ p, ソーバイ)	ニナイ p
三原	ハゴケ p, (ハゴキ)	ソーバエ p, (ソバエ p, ソーバイ p, ソバイ?)	ニナイ
西淡	ハゴケ p, (ハゴキ p)	ソーバイ p, (ソーバエ p)	ニナイ p
南淡	ハゴケ	ソバエ p, ソーバイ p, (ソーバエ)	ニナイ
[福良]	ハゴキ	ソーバイ	ニナイ, ニーナ
[沼島]	ハゴキ	ソバエ, ソーバエ	ニナイ

表 35 地域差の不明瞭な語群 (2)

地点名	松毬	土竜
岩屋	マツガサ p	オゴロモチ
東浦	マツグリ, (マツカサ p)	オゴロモチ p
北淡	トチノコ p, (マツカサ)	オゴロモチ
津名	トンチカサ p, (マツカサ)	モグラ p
一宮	トンチカサ p, (トンチコロ, チンチロリ, マツカサ p)	モグラ p
洲本	マツガサ p, (マツカサ p)	オゴロモチ p, (オゴロモチ)
[由良]	マツグリ p	モグラ p
五色	マツカサ p	オグロ
緑	マツカサ p	オグラ, オグロ
三原	チンチロ, (マツカサ p)	オグラ p, オグロ p, (オングロ?)
西淡	マツカサ p	オグロ p, (オグラ)
南淡	チンチロ p, (マツカサ)	オグロ, オゴロモチ, オングロモチ
[福良]	ND	モグラ
[沼島]	*コンチリ	モグラ

表 36 地域差の不明瞭な語群 (3)

地点名	蚯蚓	針孔
岩屋	ミミソ	ミソ p, (メド)
東浦	ミミソ	ミド p
北淡	ミミソ p	メド p, (ミソ p, ミド p)
津名	ミミソ	ミソ p, メド p, (ミド)
一宮	ミソ p, (ミミソ)	ミド p, (メド)
洲本	ミソ, ミミソ, メメズ	ミド p
[由良]	ミミソ p	ミソ
五色	ミソ p	ミド p, (メド)
緑	ミソ, ミミソ, メメズ	ミソ p, (ミド)
三原	ミソ p, ミミソ p, メメズ p, メメソ p	ミソ p
西淡	ミミソ, メメズ, メメソ	ミソ p
南淡	メメズ p, (ミソ, ミミソ, *ミミソ, メメソ)	ミソ p, (メド)
[福良]	ミミソ	ミソ
[沼島]	ミミソ	ミソ

これらは(1b)に準ずるものと言える。他にも、「縷う」[ヌウ,ノウ],「秋刀魚」[サイラ(サエラ)],…などが(1b)相当の語彙として挙げられる。

また、(1a)に準ずるものとして、全島で共通した方言形が見られる語彙もある。

- (9) 「浴びせる」[アプセル],「家」[エー],「鯉」[カツォ],「(男)兄弟」[オトドイ],「正月」[ションガツ],「虱」[シラメ],「少ない」[スケナイ],「傍」[ネキ],「畳む」[タトム],「小さい」[コンマイ],「出来る」[デケル],「七日」[ナヌカ],「並ぶ」[ナロブ],「引きずる」[ヒコズル],「蛇」[グチナ],「蝮」[ハメ],「眉毛」[マヒゲ],「筵」[ミシロ],…

(9)は淡路方言を他の方言と比較する際の指標となり得る。

また、一部の地域に特徴的な形が見られる方言語彙もある。

表 37 一部の地域で特殊な型が見られる語群

地点名	捕まえる	肩車	九日
岩屋	* チョコマエル p	* ドンデンマカ(セ) p(,カタクマ?)	ココヌカ p
東浦	チャマエル p(* チャカマエル)	カタクマ p	ココヌカ p
北淡	チャマエル p(* チャカマエル)	カタクマ,カタグマ	ココヌカ p
津名	チャマエル p	カタクマ p	ココヌカ p
一宮	チャマエル p	カタクマ p	ココヌカ p
洲本	チャマエル p	カタクマ	ココヌカ p
[由良]	ツカメヤール	* チョーサ p	ココヌカ, ココノカ
五色	チャマエル p	カタクマ p(,カタンマ)	ココヌカ p
緑	チャマエル p	カタクマ p	ココヌカ p
三原	チャマエル p	カタクマ p(,カタンマ?)	ココヌカ p
西淡	チャマエル p	カタンマ p(,カタクマ p)	ココヌカ p
南淡	チャマエル p	カタクマ p	ココヌカ p
[福良]	ツカマエル	カタグルマ	ココヌカ p(, ココノカ)
[沼島]	ツカマエル	カタクマ p	ココノカ p

他にも、「間隔が狭い(茂い)」(沼島 [シゲイ], 他 [シギョイ])「虱の卵」(灘【南淡】, 沼島 [キガシ], 他 [ケガシ]),「親戚」(沼島 [イッキョ], 他 [イッケ]), など、特に沼島に特有の語形がいくつか見られる。

4. 淡路方言の下位区分の試み

今まで見てきたアクセントと語彙の地域差に基づき、淡路方言の下位区分を試みる。

アクセントでは(H2{H1}), (L2//L0), (L2//H1)の対応が目立つが、南北分布の(L2//L0), (L2//H1)では大きく北部(岩屋・東浦・北淡・津名・一宮)と中・南部(洲本・由良・五色・緑・三原・西淡・南淡・福良・沼島)に分けられ、周圏分布の(H2{H1})によって岩屋が他の北部から分けられる。形容詞の活用形でも同様に、「～けりゃ」は(-2//3)であり、北部が中部の五色を取り込み(岩屋・東浦・北淡・津名・一宮・五色)と(洲本・由良・緑・三原・西淡・南淡・福良・沼島)に分けられるが、「～かった」(-4{-3})では(H2{H1})に準ずる。複合名詞の(-2{-3})は、男性に注目すれば(岩屋・由良・三原・西淡・南淡・福良・沼島){(東浦・北淡・津名・一宮・

洲本・五色・緑) である。

語彙でも南部と北部で分かれる例(岩屋, 由良・沼島などを含まない場合も)が豊富に見られる。「秤」, 「(家を)壊す」, 「棘」, 「病気・疲れ」は北・中部 vs. 南部, 「米櫃」, 「(雨が)漏る」, 「膝頭」, 「肥桶」, 「～だろう」は北部 vs. 中・南部の様相を呈する。

これらの例から, 淡路方言を大きく(北部)・(中部)・(南部)に3区分することができる。

- (10) 北部型: H1 (H1{H2}), L2 (L2/L0), L2 (L2/H1), -2(けりゃ), -3(かった), -3(複合名詞), コボツ「(家を)壊す」, ケンビキ「病気・疲れ」, ボル「(雨が)漏る」, チギ「秤」, タゴ「肥桶」, ソゲ「棘」, ゲブツ「米櫃」, スネボン「膝頭」, メンタマ「目玉」, ミトチン「めだか」, ダロ「～だろう」
- 中部型: H2 (H1{H2}), L0 (L2/L0), H1 (L2/H1), -3(けりゃ), -4(かった), コボツ「(家を)壊す」, ケンビキ「病気・疲れ」, プル「(雨が)漏る」, チギ「秤」, タゴ「肥桶」, ソゲ「棘」, トビツ「米櫃」, ヒザブシ「膝頭」, ダー「～だろう」
- 南部型: H2 (H1{H2}), L0 (L2/L0), H1 (L2/H1), -3(けりゃ), -4(かった), -2(複合名詞), コボス「(家を)壊す」, ケンベキ「病気・疲れ」, プル「(雨が)漏る」, チンギ「秤」, タゴ「肥桶」, ソッピラ「棘」, トビツ「米櫃」, ヒザブシ「膝頭」, メコタマ「目玉」, ミミジャコ「めだか」, ダー「～だろう」

この基本対応に対して, (11)の地点は一部の特徴を共有しない。

- (11) 岩屋: 北部型主流に対し H2 (H1{H2}), -4(かった), -2(複合名詞), チンギ「秤」(, ジャロ「～だろう」)
- 由良: 中部型主流に対し コボス「(家を)壊す」, ボル「(雨が)漏る」
- 沼島: 南部型主流に対し ゲブツ「米櫃」

「松葉」, 「こむら返り」, 「蓬」, 「百足」などの周囲分布によって, 南部を中心にさらに下位区分を設け得る。また, 「大きい」, 「仲人」などによって「岩屋・由良・福良・沼島」がさらに特徴づけられる。特に, 「松葉」, 「こむら返り」, 「蓬」, 「百足」は南部の一部と五色に共通した特徴が見られるため, これらに基づき五色を中部から下位区分し得る結果, 中部では(洲本)・(由良)・(五色)が鼎立することになる。

5. 課題

これまで, アクセントや語彙の方言差の実例を示し, それにより淡路方言を下位区分することが可能であることを示した。多くは南北型の対立を示した。本稿では通時的変化は極力考慮せず, 異なるアクセントや語形を対等に扱って, 共時的な特徴による区分の可能性を考察した。そのため, 例えば(L2//L0)とまとめた対応で, L2 > L0 か L0 > L2 かななどを個別に考察することは避けた。一方, 分布からアクセントや語形の新旧が推測できる場合もある。その場合, 新しい特徴, すなわち改新を共有する場合を重視することで, 今回の区分を見直す必要が出てくる

可能性がある。その最大の問題は「中部」(中淡)の設定である。今回の下位区分では、中淡は(北・中) vs. (南)と(北) vs. (中・南)のような分布により設けたもので、中淡の積極的な特徴((中) vs (北・南)など)はまだ見つかっていない⁴³。さらに、由良は「(家を)壊す」、「(雨が)漏る」という島を二分する重要な語形を他の中部と共有せず、五色は南部の一部と共通した形が見られる(「目玉」、「百足」、「こむら返り」など)ためこれらを重視して五色を南部の一部と見ることもできる。通時的な系統関係を考慮すると、「中淡」という区分は不要になる可能性がある。先行研究も多くの場合、淡路方言を大きく3つに区分するが、「中淡」の設定の是非については今後の課題としたい。また、本稿では戦前生まれの話者を対象とし、世代差は考慮しなかったが、1916年生～1944年生と実際には幅があり、違いを無視できない可能性がある。

6. まとめ

本稿では、淡路方言に見られるアクセントや方言語彙の地域差に基づき、淡路方言の下位区分を試みた。共時的に共有される特徴から、北部型・中部型・南部型の3つに大きく区分され、さらに岩屋、由良、沼島などの周辺部が下位区分されることを述べた。一方、「中部」はまとまりが弱く、通時的観点から再分析した場合にその設定が見直される可能性がある。

謝辞

本稿を執筆するにあたってお世話になった淡路島の以下の皆様にお礼申し上げます。

青石協、東久正、井内節雄、砂川久巳、稲山忠利、井上さゑ子、岩見泰江、岩本孝之、上田弘子、大住昌義、太田幸雄、大迎智子、大山朱実、岡田貞男、岡田千枝子、岡本末吉、奥野邦二、奥野忠弘、笠山昭、柏木豊、桂孝弘、角村恵美子、川口齊、川西ふみ子、川野計郎、神田久雄、喜田延子、北岡肇、北山学、行司良雄、倉本恵美子、越岡邦雄、児玉百合子、小央昭夫、小林俊隆、近藤多賀子、酒井あき子、坂本祐子、坂本昌穂、笹田季子、佐野教弘、宗和恒夫、田浦とく子、田尾房江、高田和子、高田欣二、高倍明治、瀧川静馬、武田信一、谷口正一、谷本勢津子、谷本信雄、田村富美、田村隆司、貫益巳、土井玲子、徳田壽春、富永宗伯、豊田喜代子、豊田八千代、長江良彰、中川宜昭、中川やゑ子、仲田幸子、長手正子、中村律、灘健三、新島弘明、西岡芳美、西岡善一郎、西岡美知子、西口ひでの、西久保欣子、西田久代、西田正美、登里伸一、畠田茂嗣、服部達明、林喜美子、林久美、原尾みつ子、針立保、坂東喜代子、東根秀男、広瀬和善、福田豊子、藤井雅子、藤井優子、藤岡イチエ、藤本節子、別所美佐子、前田和義、前田幸男、正井良徳、正井香代子、増田博茂、増水一二、松本貞雄、丸一壽、溝尾勉巧、溝尾正子、南美代子、宮本暢夫、森崎アンナ、安田勝子、柳谷千秋、山田泰生、山中みつ子、吉益實子。(敬称略)

⁴³ 禰宜田(1986)が「ホーレン草」のアクセントを「北部:H2, 中部:H0, 南部:L0 [LLLLHH]」(p.89)と記述しており、これが正しければ中部に共通した特徴ということになる。

付記

本稿の地図は国土地理院のデータをもとに MANDARA (ver.9.37)を用いて作成した。

参考文献

- 岩本孝之(2013)『じょろりでいこか!淡路ことば辞典』神戸: 神戸新聞総合出版センター. 436pp.
- 上野善道(1985)「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布(1)」『日本学士院紀要』40(3): 215-250.
- (1987)「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布(2)」『日本学士院紀要』42: 15-70.
- (1992)「昇り核について」『音声学会会報』199: 1-14.
- (2006)「日本語アクセントの再建」『言語研究』130: 1-42.
- 金田一春彦(1974)『国語アクセントの史的研究—原理と方法』東京: 塙書房.
- 中井幸比古 編(1997)『高知市アクセント小辞典』神戸: 神戸市外国語大学.
- ほか 編(1999)『徳島市方言アクセント小辞典』神戸: 神戸市外国語大学.
- 編(2001)『京都市方言アクセント小辞典』神戸: 神戸市外国語大学.
- 編著(2002)『京阪系アクセント辞典』東京: 勉誠出版.
- 高橋頭志(1982)「淡路島の方言」『講座方言学7 近畿地方の方言』:253-276. 東京: 国書刊行会.
- 中澤光平(2011a)「淡路島方言における『助詞「が」・「は」の融合形』とその音韻的解釈」『日本方言研究会第92回研究発表会発表原稿集』:1-8.
- (2011b)「淡路島方言における動詞のアクセント体系の地域差」『東京大学言語学論集』31: 187-196.
- (2012)「淡路島方言におけるアクセントの地域差と歴史—京阪神方言、四国方言との対照—」『JLVC 2012 予稿集』:55-58.
- (2013)「淡路方言の地域差と成立過程」『JLVC 2013 予稿集』:195-204.
- 禰宜田龍昇(1986)『淡路方言の研究』神戸: 神戸新聞出版センター. 234pp.
- 松森晶子・新田哲夫・木部暢子・中井幸比古 編著(2012)『日本語アクセント入門』東京: 三省堂.
- 山岡華菜子(2012)「淡路島のアクセントについて—アクセントの変化傾向と進度の違い—」『日本方言研究会第95回研究発表会発表原稿集』:49-56.
- (2014a)「淡路島方言アクセントにおける二拍名詞—第4・5類の合同傾向—」『早稲田日本語研究』23: pp.24-35.
- (2014b)「京阪式アクセント地域における3拍形容詞のアクセント—淡路島・大阪府南部を中心に—」『国文学研究』172: 47-37.
- 山本俊治・飯野百合子(1962)「兵庫方言—その分布と分派—」『武庫川女子大紀要』10: H:73-108.

An Attempt on Classifying Subgroups of the Awaji Dialects Based on Regional Differences

NAKAZAWA, Kohei

koheinakk@12.alumni.u-tokyo.ac.jp

Keywords: Awaji dialect, regional difference, accent, subgroup, dialectal form, distribution map

Abstract

Among the Awaji dialects (Hyogo Pref.), there are some regional differences in the patterns of pitch accent and dialectal forms. This paper proposes that the Awaji dialects can be classified into three major subgroups (north, central and south group) based on the isoglosses of these regional differences. On the other hand, central groups do not show any shared innovation, indicating that there are no support to determine this branch from diachronic viewpoint.

(なかざわ・こうへい 博士課程)